

# 市町村間の連携による 湿地を活かした地域づくり

ラムサール条約登録湿地関係市町村会議  
第 10 回学習・交流事業の記録

2019 年 3 月

ラムサール条約登録湿地関係市町村会議



# 目次

I. プログラム	1
II. 学習・交流会	3
1. 開会挨拶	3
熊谷 裕樹 宮城県大崎市産業経済部世界農業遺産推進課 課長	
2. 来賓挨拶	4
堀上 勝 環境省自然環境局野生生物課 課長	
3. 趣旨説明	5
コーディネーター：朝岡 幸彦 東京農工大学農学研究院 教授	
4. 基調講演	8
自然を活かした地域づくり	
岡田 知弘 京都大学大学院経済学研究科 教授	
5. 各地域からの報告	18
市町村等連携による渡良瀬遊水地の取り組み	
深澤 剛 栃木県栃木市 総合政策部遊水地課 副主幹	18
6. グループワーク	21
1) 第1クール	21
2) 第2クール	26
7. まとめ	34
8. 閉会	40





# I. プログラム

第10回 ラムサール条約登録湿地関係市町村会議 学習・交流会

## 「市町村間の連携による湿地を活かした地域づくり」

### 1. 目的：

ラムサール条約に登録されている湿地及びその他の湿地の適正な管理に関し、関係市町村間の情報交換及び協力を推進することによって、各地域の湿地保全活動を促進することを目的とする。

また、学習・交流会においては湿地の保全や活用において活躍する自治体・NPO・団体関係者が意見や情報交換する場を設けることで、湿地のワイズユースのための連携を図り、個々の活動および地域の活性化を促進することを目的とする。

2. 開催日： 11月2日（金曜日）9:00～12:30

3. 会場： 山形県鶴岡市「荘銀タクト鶴岡（小ホール）」

所在地：山形県鶴岡市馬場町11番61号

### 4. プログラム：

▶挨拶（9:00～9:05）

熊谷 裕樹（宮城県大崎市産業経済部世界農業遺産推進課 課長）

▶来賓挨拶（9:05～9:10）

堀上 勝（環境省自然環境局野生生物課 課長）

▶趣旨説明（9:10～9:20）

コーディネーター：朝岡 幸彦（東京農工大学農学研究院 教授）

▶基調講演（9:20～10:10\_質疑応答含む）

「自然環境を活かした地域づくり」

岡田 知弘（京都大学大学院経済学研究科 教授）

➤各地域からの報告（10:10～10:30\_質疑応答含む）

報告 「市町村等連携による渡良瀬遊水地の取り組み」

深澤 剛（栃木県栃木市 総合政策部遊水地課 副主幹）

【 休 憩 】

➤グループワーク（10:40～12:15）

第1クール

第2クール

➤まとめ（12:15～12:30）

➤閉会

## Ⅱ. 学習・交流会

鈴木耕平（司会）：皆さん、おはようございます。それでは平成30年度ラムサール条約登録湿地関係市町村会議 第10回学習・交流会を始めさせていただきます。大崎市の世界農業遺産推進課の鈴木と申します。よろしくお願いいたします。

それでは2日目の開催としまして、大崎市産業経済部世界農業遺産推進課長、熊谷裕樹よりご挨拶申し上げます。よろしくお願いいたします。

### 1. 開会挨拶

#### 大崎市産業経済部世界農業遺産推進課長 熊谷裕樹



おはようございます。昨日は、鶴岡市さんの協力を得て、大山上池・下池を視察させていただき、非常に感動いたしました。夜には皆さん相互に情報交換・意見交換を行いまして、それぞれいろいろな参考になる情報を交換できたと思います。

本日は「市町村間における連携による湿地を活かした地域づくり」をテーマとして、学習・交流会を開催させていただきます。この学習・交流会の第1回目は平成22年1月に石川県加賀市で開催され、今回、10回目の開催を迎えます。本日ご参加いただいた皆さんにとりまして情報交換、新しい知識の習得といった有意義な形のなかで、ラムサール条約登録湿地の保全と活用を通して地域づくりを意識しながら研修を進めていきたいと考えています。

#### 世界農業遺産に認定された大崎市

湿地の保全と活用について、大崎市の例をお話させていただきます。昨年12月に国連食糧農業機関（FAO）から世界農業遺産に認定されました。今年4月にはイタリアのローマのFAO本部において認定書の授与式が行われました。大崎市他周辺4町と合わせて1市4町の枠組みで取り組んでおり、それぞれの首長とあわせて市民ボランティア30名の方々が自費で参加いただいています。

こういった機運をとらえて現在、関連の団体が世界農業遺産の認定を記念した冠をつけてイベントを行ったり、市内の高校で総合学習プログラムの中に農業遺産を組み入れていただいたりしてきました。さらに、教育委員会等と連携しながら小学校の副読本をつくらうという取り組みがあります。また、世界農業遺産弁当ということで、JR仙台駅で販売され、さらに地元の金融機関では認定記念の定期預金をつくり販売していただいています。こうした機運の盛り上がりもあって官民一体で取り組んでいる状況です。

#### 湿地の保全活用計画と連携し、世界農業遺産の取り組みを

一方、市民からのご意見として頂戴しているのは、認定がゴールではない、今後の保全と活用

が非常に重要であるというご意見を頂戴しています。これを受けて現在本市においては基本計画を具体的な施策に展開していこうと、アクションプラン推進会議を立ち上げて、多様な団体の方々に参画いただきながら検討を進めているところです。

なかでもメインの事業は大崎地域、1市4町は昔から大崎耕土と呼ばれておりますが、地域一円をフィールドミュージアム構想、屋根のない博物館ということで地域資源を活用しながらもう一度見直してみよう、魅力を再発見して地域内外に発信しながら、地域間交流を促進して地域の活性化につなげていこうという取り組みを行っています。

本市にはラムサール条約登録湿地が化女沼と蕪栗沼・周辺水田の2箇所あり、これらが中心となる地域資源であることは間違いありません。湿地の保全活用計画とも連動しながら世界農業遺産の取り組みもあわせて進めていきたいと考えています。我々も皆さんからいろいろな情報を提供していただきながら、ご指導いただきながら進めていきたいと考えています。

ラムサール条約登録湿地関係市町村会議におきましては、今後ともネットワークを活かし、市町村間並びに関係機関と連携を図りながら、さらなる本市町村会議の発展につなげていければと考えておりますので、今後ともご協力のほど、お願いしたいと思います。

本日は約半日の日程ですが、ご参加いただいた方々にとって有意義な時間となることをご祈念申し上げ、また開催にあたってご協力いただいた関係の皆様、ご指導いただく先生方に心から感謝を申し上げて、開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。  
(拍手)

司会：続きまして、来賓挨拶を環境省自然環境局野生生物課長、堀上勝さんからいただきます。よろしく願いいたします。

## 2. 来賓挨拶

### 環境省自然環境局野生生物課長 堀上 勝

皆さん、おはようございます。昨日はお疲れ様でした。日頃から、皆さんには湿地の保全やワイズユースにご協力いただきましてありがとうございます。毎年、この関係市町村会議にお招きくださりまして、大変感謝しております。

#### 10月に開催されたラムサール条約第13回締約国会議

昨日の会議でもお話しましたが、先週、ラムサール条約締約国会議に行って参りました。3年に1回の大きな国際会議ですのでいろんな国の取り組みが話されています。各国が発言するときには湿地の重要性あるいはワイズユースに関する自国の取り組みを重ねて発言されることが多く、それぞれ取り組みが進んできていることと、熱意を感じた次第です。

日本としても、ラムサール条約の推進を一層進めていかなければならない、という気持ちを新たにしたいところで、今回の会議に参加しています。



## 2ヶ所の追加登録により重要性が増す市町村会議

3年に1回の締約国会議にあわせて、日本では毎回条約湿地の登録を進めていますが、今回、南三陸町の志津川湾と、東京都江戸川区の葛西海浜公園が登録されました。また、豊岡市の円山川下流域・周辺水田の面積拡張がありました。新しく関係する市町村が2つ増えています。市町村会議の重要性はますます増してくると思います。

昨日も現地視察で大山上池・下池を視察いたしました。たくさんのコハクチョウの群れ、カモの群れに非常に感激しました。皆さんも「ほとりあ」の取り組みがとても頭に残ったと思います。自らの地元での取り組みとあわせてご覧になったのではないかと思います。

夜の意見交換会でも、様々なお話をうかがうことができました。やはり地域の課題あるいは取り組みの今後をどうするかということを、皆さんは常に考えていらっしゃる。この市町村会議で毎年必ずどこかで集まるということが重要だと思います。

## 環境省と市町村が連携して保全とワイズユースの推進を図りたい

市町村の方々が新しく増えますし、今後もさらに増えていくと思います。環境省でも皆さんと一緒に連携する手立てを探って、ラムサール条約の精神に則って保全とワイズユースを進めていきたいと考えております。

最後に、この市町村会議、本学習・交流会が今後のラムサール条約の湿地の保全とワイズユース推進に向けて有意義な会となりますことを心からご期待しまして、私のご挨拶といたします。本日もよろしくお願ひいたします。(拍手)

司会：堀上さん、ありがとうございました。続きまして、趣旨説明としましてコーディネーターの東京農工大学農学研究院教授の朝岡さんをお願いいたします。

## 3. 趣旨説明

コーディネーター 東京農工大学農学研究院教授 朝岡幸彦



皆さん、おはようございます。昨年に引き続き、コーディネーターを仰せつかっております東京農工大学の朝岡と申します。

今日はいくつもの仕掛けがございまして、まずテーブルが無いことに皆さんお気づきだと思います。秘密兵器を用意していますので、楽しくワークショップをしていただければと思います。

### 「連携」をキーワードに地域づくりを

今年のテーマは「市町村間の連携による湿地を活かした地域づくり」です。今年、「連携」をキーワードにして地域づくりをしていこうということの2回目になります。昨年の基調講演

のなかで、ダムカードのお話が出てきました。そのアイデアをうまく活かして、仮称ですが「ラムサール条約登録湿地カード」をつくったら、この市町村会議にたくさんの市町村が入ってくれるのではないかと期待して、こうしたことをやってみようかというお話です。

基になった考え方は、昨年の基調講演、九州大学の島谷幸宏さんの「グリーンインフラとしての湿地の役割と可能性」というお話です。それを受けて、画面にあるダムカードのようなものをラムサール条約登録湿地につくってみようかということです。

### 栃木市の渡良瀬遊水地の取り組み

地域づくりを進めるにあたって、本日の資料の中にあるように、基調講演はもちろん、栃木市から渡良瀬遊水地の取り組みを報告していただきます。実は渡良瀬遊水地では既にカードをつくっておられます。後でカードのサンプルをお配りしますが、そういうモデルがあるので、それをもう少しブラッシュアップして、おもしろい取り組みができるのではないかと考えています。

ただ、カード、カードという話にならないようにするために、湿地を活かした地域づくりとして、昨日行ったところにこのようなもの（ウシガエルの骨格標本）がありました。非常によくできています。ただ、大事なことはここで終わっていないことです。皆さん、昨日召し上がれなかったと思いますが、鶴岡市内のレストランに行くと、一番右上が小さめのウシガエルのスープ、その下が福神漬けに見えますが、アメリカザリガニをゆでたものです。一番下が大きめのウシガエルのチューリップから揚げです。これはなかなか美味しかったです。

このように、駆除して展示するだけでなく、食べてしまう。さすが「美味しい空港」がある街だなと思いました。こういう地域づくりもあります。ただ、そうは言っても、敢えて1つの取り組みとして、ラムサール条約登録湿地カードを皆で考えて作ってみましょうということです。

### ワークショップでラムサールカードのデザイン作りを

考え方としては、渡良瀬遊水地のカードがあるので、これがどういうもので、なぜ作られたのか、どう活用されているのかという話を最初にお聞きします。その上で皆さんに2クールのワークショップで、実際に湿地カードのデザインを作ってもらおうと考えています。ただし、皆さん、いろんなところから来られていて議論しにくいので、素材としては昨日見学させていただいた大山上池・下池をモデルに、カードのデザインしていただきます。そういうコンセプトです。

これは大山上池・下池の写真です。グループワークはだいたい1時間40分ほどです。資料に詳細を書いていますので、後ほど見てください。第1クールは「えんたくん」という秘密兵器、円形の段ボールを使ってもらいます。5、6人で協力していただいて膝の上に「えんたくん」を乗せたら、距離感がぐっと縮まります。最初にペンを持って、リーダーの進行によって、昨日見た上池・下池の魅力をどんどん書いてもらいます。丸い模造紙に自由に、自分の方向から書いてもらいます。

大事なことは、自分が考えたことを書くだけでなく、他の人の話を聞いて、「いいな」と思ったら書いていいということです。自分のメモ帳が目の前にあると思って、どんどん書いてもらう。大事なところには丸をつけたり、アンダーラインを引いたりして、それぞれの方向から気になることをどんどんメモしていく。これが「えんたくん」の使い方、それが最初の作業です。

その後、リーダーを一人だけ残して他の方は他のグループに行きます。リーダー以外は誰も残ってはいけません。混乱するのではないかと考えるかもしれませんが、やってみると意外とスムーズです。椅子の数が決まっていますから空いているところに座るしかなくなるので、スムーズに

いくはずです。リーダー以外の方は全員入れ替えです。

第2クールでは、リーダー以外新しいメンバーで湿地カードのデザインをします。この場合は「えんたくん」は使いにくいと思いますので、模造紙を使って、議論しながら大山上池・下池の湿地カードの表裏のデザイン案をつくってもらいます。第2クールの冒頭で、リーダーは「えんたくん」を基に「前のグループではこんなことが議論になった」と簡単に説明しますので、そうした意見を共有した上で、カードのデザインをしてもらいます。

### **グループごとにユニークなデザインのカードを**

後に、カードのデザインができるはずですが、表だけ、裏だけというグループもあるかもしれませんがそれはそれでいいので、皆さんが協力して、作業してください。最後に、「私たちのグループはこんなにすごいデザインを考えました」と、発表してもらいます。

できるだけユニークな方がいいです。一つだけお願いしたいのは、ダムカードと渡良瀬遊水地カードのデザインを真似しないでいただきたいことです。あれらとは違った面白いデザインを考えていただきたいのです。

この目標は、市町村会議の野望があり、ここでいいデザインができれば来年度か再来年度に予算をつけてもらって本気でカードを作って、カード巡りをする市民を増やしていこう。そうするとラムサール条約登録湿地もかなり人気が出るのではないかという野望です。これも今日のデザイン案のでき次第ですので、ぜひ頑張って作っていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。(拍手)

**笹川孝一**：質問です。大山上池・下池のことをグループワークで行うと言っておられますが、ほとりあや都沢湿地を含めて考えてもよろしいでしょうか。

**朝岡**：はい、その通りです。

**司会**：朝岡さん、ありがとうございます。続きまして、基調講演としまして、「自然を活かした地域づくり」について、京都大学大学院経済学研究科教授、岡田知弘さんをお願いいたします。講師の方々のご紹介につきましては、講演時間とワークショップの時間を多く取らせていただきたいため、資料でのご紹介とさせていただきます。

それでは岡田さん、よろしくお願いいたします。

## 4. 基調講演

### 「自然環境を活かした地域づくり」

京都大学大学院経済学研究科教授 岡田知弘

#### はじめに

皆さん、おはようございます。昨日来、ご苦労様です。私は富山県の出身で日本海側なので、鶴岡市のこの時期の気候が懐かしく感じます。鶴岡でこういう会議をやるということで朝岡さんから講演のご依頼があった時に、「私はラムサール条約や湿地に関して何も知りませんよ」といったんお断りしかけたのですが、「地域づくりに関わって自然環境一般に話を広げてもかまわない」と言われましたので、ここに登壇したわけです。

私は富山県高岡市の出身ですが、こちらの雨晴海岸から3,000mクラスの立山連峰が非常によく見える。世界でここしかないという自慢の景色です。山岳地帯から川が流れ、富山平野、砺波平野があります。私の実家はこの近くです。砺波平野は水田地域で、散居村という独自の歴史的景観をつくってきています。水と土とコメ、お酒というような、自然と生活の連関性のなかで生まれ育ったわけです。

私が中学・高校時代に、公害問題が起こり、イタイイタイ病や水俣病の裁判の判決が続きました。地域開発をして皆さんが豊かになるはずが、どうして公害問題が起きてしまうのか。その研究をしたくて京都大学に入り、最初に地理学をやりました。でも文学部の歴史地理学はいろいろ解釈するけれども、なかなか現状分析や政策の話にはいかないということで、地域経済学をやろうと経済学部へ転学して、現在に至っています。

今は京都市内の嵯峨野の近くに住んでいます。昨日の上池・下池の景観とそう変わらないような景観です。これは広沢の池です。去年の秋の写真ですが、今頃から渡り鳥がやってきて、すぐ横が嵯峨野の田園地域です。歴史的風土特別保存地区で、すべて市が農地を買い取っています。したがって非常に広い空間が水田として残っています。そこにサギがやってくる。

今、ここで大きな事件が起こっています。土地改良区が広沢池を管理していたのですが、ボートの貸し出し事業をやっていた方が亡くなり、世話をする人がいないとのことで、市が直接管理するという事態になっています。

今日は、私がこれまで訪ねた、自然との関わりをなかで地域づくりをやっているところを紹介して、皆さんのこれからの活動の参考になればと思っています。

今回ご出席の自治体は24ではないかと思いますが、私はそのうち19市町を訪ねています。統計だけを扱うのではなく、地域の現場に入って地域経済学を研究しており、フィールドワークを中心にしています。それと理論と政策を重ねていこうというものです。震災の被害を受けた南三陸町にも2-3回お邪魔しています。





## I 地域をどのようにとらえるか

### 1) 地域とは何か

地域についての皆さん方の捉え方は、おそらくバラバラだと思います。上池・下池という狭い集落の範囲を連想する人もいれば、鶴岡市、山形県、東北、東アジア地域という広がりでも考える人まで、その範囲はバラバラです。それでは地域政策も地域づくりも展開できません。

地域を本源的にたどれば、とても狭い領域です。人類史的にみると、最初は歩ける範囲で人間は自然に働きかけを行って、それから衣食住の生活手段を得た。衣食住の生活手段を消化・消費した後の廃棄物を自然に戻していく。一種の物質代謝であり、メタボリズムと言います。これが人間と自然の代謝関係であり、本来の経済活動です。

ところが、人間はとても賢い動物で、物々交換をしているのはとても不効率だということで貨幣を発明し、150年前に資本主義社会に入ったときに企業が誕生しました。こうすることによって人間の生活領域をはるかに越える経済主体が生まれます。一国経済、あるいは世界経済を対象とする大きな企業群が生まれてくるわけです。

### グローバル経済と地域産業の空洞化

今、グローバル経済と言われていますが、だいたい30年くらい前からグローバル経済に入ったと、私は考えています。日米貿易摩擦の結果として、大企業が一気に海外に出ていき、多国籍企業化する。代わりに地方の工場がどんどん閉鎖・縮小されて、地域産業の空洞化が始まる。

農業に関する大きな問題は、日米貿易摩擦のときに、アメリカが貿易赤字を解消したいために、日本に農産物・畜産物を輸出するための通商協定を強く求めてきたことです。これはWTOに象徴され、そしてTPPにも繋がります。つまり農産物とその加工品の輸入が爆発的に増えていくことによって、農業が衰退していく過程が1980年代半ばから一気に加速していきました。

結果として、ため池を活用する農家が少なくなってしまう。担い手がいなくなってしまう。そして人口が急速に減ってしまう。これが多くの地方が悩んでいる事態です。つまり経済のグローバル化が進行していくと、工場の海外移転などで、企業が育った地域が崩れてしまう。周辺の地域が崩れてきている。こういう時代に私たちは生きていくということです。

自然条件に規定された生産・生活様式—先ほど紹介のあった鶴岡における食・農の生産・生活様式は、まさにここしかないわけです。地域の人々が歴史的に活用してきたものは、与えられた自然そのものではなく、人間がずっと維持して、手を加えてきた自然である。その「人間的自然」と私たちは共存してきたという関係です。

### 地域の個性を把握し主体者が連携し地域をつくる必要がある

地域は、今や集落の広がりから一国経済、世界と重なっています。これを「重層性」と言います。どこから先につくられたのかと考えると、日常的にはニューヨークの証券取引所の株価が暴落すると日本の株価にどう反映するか、鶴岡の経済にどう影響するかというようにメディアは報道しますが、それが繰り返されることによって錯覚の像ができてしまっています。世界経済が先にできて、日本経済や地域の経済が後でできているというのは、論理的にも実体的にもおかしい。各地域経済のところで生活を営む経済活動が歴史的に基礎細胞のようにあり、これらが結合してより広い経済圏ができ、社会的な圏域ができてくる。これが最終的に一国経済になり、世界経済となる。そういうことを考えると、足下がとても大事なのです。

たとえば皆さんが今働いている自治体にどれだけの人が働いていて、どれだけの人が失業しているか、すぐに答えられる方はいますか。実は、誰ひとりいないのです。5年ごとの国勢調査で初

めて就業状況の全数調査がされていますが、それが発表されるのは2年後なのです。山形県の場合、2015年の国勢調査による就業状況の結果表は、2017年2月に発表です。また、東京が人口面でも経済面でも大きなウェートを持ちすぎて、日本平均になると実態が全くわからない。足下がどうなっているかということ、地域の個性がありますから、それを改めて把握しなければならないのです。どういう地域のつくられ方をしているのかということを見た上で、そこで主体的な動きをする人たちは誰でしょうか。それは、住民であり、企業であり、地方自治体です。それらが連携しながら地域をつくっていくことがグローバル化時代だからこそ必要になってきているのです。

## 2)地域の成り立ち

地域の成り立ちは、まず自然環境がある。人間が生まれる前からです。ここで人間が生きていくためにつくっていく建造環境が造られる。ため池も1つの建造環境です。あるいは建物、道路、農地もつくられた環境、建造環境です。それを活用しながら生活や生産を繰り返す主体があります。これが家族、企業、学校、自治体であり、これらを総称して社会関係と言います。個々の地域の特性に合わせた形で、そこに住む人々が地域と同じように個性的に存在しているということが、今の地域のあり方ではないかと思えます。

ただ、一方で、企業がどんどん大きくなって資本が蓄積されてくると、富が集中するところが生まれてきます。それが東京です。東京と地方という関係が日本の国土上で広がっている。そこで地域の経済や社会や、皆さんが担当されているような自然環境、湿地をどう持続させるかが問題です。これは特別なエネルギーが必要ですし、これまでおそらく私たちの祖先が体験しなかったような新しい試みではないかと思うのです。

## 3)個別の地域経済・社会が形成・維持される決定的条件→地域内再投資力

地域内で経済、社会を支えているのは誰かということ、グローバル企業ではありません。99.9%が中小企業です。全国平均は7割ですが、鶴岡ではおそらく90%を超える人たちが中小企業、小規模事業所で働いています。そこに農家や協同組合が加わり、地方自治体も多くの予算を毎年毎年、地域に投じて経済活動を繰り返している。そうすることによって経済が成り立っていき、社会が維持され、さらに景観も維持されていくことができている。

こういう形で個々の地域がつくられています。それが崩れてしまった時から「地域づくり」という言葉が生まれました。地域づくり、まちづくり、村づくりという言葉はいつから始まったのか。論文タイトルを検索すると、1970年代後半からであり、それほど古くないのです。2回のオイルショックの後、80年から「一村一品運動」が大分県で始まります。そういうことに象徴されますが、危機をしっかりと自覚したところから、自治体と住民が連携しながら地域づくりを開始していく。

## 現代の地域づくり——主体形成の継続

先ほど地域の形成について簡単に説明しましたが、建造環境、自然環境、社会関係を意識的、計画的につくっていくことこそが、現代の地域づくりではないかと思えます。ただ、がむしゃらに頑張ればいいというものではない。一村一品運動の故郷である大分県で調査すると、20年経ったところで、実はほとんどが衰退していました。残っていたのは、この運動の本家といわれる湯布院と大山（現在の日田市）の2つくらいしかないのです。そこでは、一村一品ではありません。一村多品なのです。かつ、きちんとした主体形成が継続している。ここにポイントがあります。

正しい処方箋をつくることによって次の世代にバトンタッチできる。行政だけでなく住民のと

ころでバトンタッチできる仕組みづくりが必要だということになります。

## II 地域が豊かになるとはどういうことか

### 1)戦後の地域開発政策の基本的考え方

皆さんが産業立地の部署に行かれたら、「企業を誘致したら豊かになるのではないか」と考える機会もあるかと思います。私の高校時代、富山県では吉田実さんという知事が、池田勇人首相の言う「所得倍增計画」をやるために、企業誘致をしようと思いました。そうすれば富山県民も豊かになるだろうと考えた。けれども、イタイタイ病だけでなくいろんな公害問題が出てしまった。今は誘致した企業も撤退してしまっているところが多い。

### 2)なぜ、従来の大型公共事業+企業誘致型地域開発政策は失敗したのか

「大規模公共事業を入れて企業を誘致すれば地域が活性化する」という議論自体が、実は検証に値するものではないか。というのも、大規模公共事業をやったとしても、発注先が東京のゼネコンである場合、あるいはそこで使う建設機材、鉄鋼などの素材供給メーカーの本社が東京にある場合が多い。お金の流れはどうなるでしょうか。このグラフ（資料11ページ）を見ると、東京都の第1次産業生産額比率はほぼ0%です。同じく第2次産業で10%、第3次産業で20%しかありません。

ところが東京都の法人所得額の比率は今、5割を超えています。これはどこから来るか。海外からの投資の収益はもちろん、それ以上に大きいのは各地域にある東京本社の企業の分工場や支店等々の純利益が移転されているからです。所得移転による地域格差が非常に広がっているのです。

東京の丸の内は、生産はしていないけれど、本社機能があるだけで人がたくさん集まってくる。これは私のふるさとです。宿場町ですが、午後2時に人っ子ひとり歩いていない。こういう情景がどこでも見られます。

### 「回転ドア」と「ブーメラン効果」

どうしてこういうことが起こっているのか。レジュメに白川前日銀総裁の言葉が入っています。白川さんは一時、京大の公共政策大学院で仕事をしていたことがあり、一緒にセミナーをやりました。彼は世界経済、日本経済、地域経済というタイトルで話したのです。戦後、どんどん公共投資も誘致先の投資も行いながら、地域の経済が発展せずに衰退していくのか。彼がとてもわかりやすい言葉で表現しました。「回転ドアに問題があるのだ」と。

公共投資でいったん地域にお金が入っても、くるっと回って外に出てしまう。そして公共投資の結果として、自然環境が破壊されてしまって、これは永続的に失われてしまう。誘致した企業も設備投資はするけれども、その結果生み出される利益は回転して東京に戻ってしまう。これが問題であるというお話をされました。

これを、開発経済学では「ブーメラン効果」といいます。日本からODAで途上国に投資をして援助しようと言いながら、現地で日本の企業が受注していたら、くるっと回って援助金が東京に戻ってしまうという仕組みです。地域では、途上国を含めて持続的発展が不可能になる。こういう例が指摘されているわけですが、それと同じことが国内でもあるのです。ではこれに対してどうするか。

### 3)「地域が豊かになる」とは、住民ひとり一人の生活が維持され、向上すること

立派な道路やハイテク工場ができて、地域が豊かになったとは言えないのではないかと。地域

というのは、地球上のある特定の区画でしかありません。問題は、その地域に住んでいる一人ひとりの住民が豊かになっているかどうか。所得が向上し、かつ生活の質が上がるかどうかです。これこそが本来の豊かさではないか。だとすれば、住民がもっとも関わっている中小企業や農家や協同組合の分野での地域での再投資をする力を全体としてどう高めるかが問題となります。私はこれを「地域内再投資力」と呼んでいます。地域内で繰り返し投資する力です。

なぜかという、地域で投資しても利益が外に出てしまうのを止めるためには、地域にしっかりと投資の本社機能があって、そこで投資を繰り返す。販売先は海外でも東京でもかまわない。利益は必ずその地域に戻ってくる。さらに翌年再投資することで、雇用やサービスや原材料を調達することが持続できるわけです。そういう力を質的にも量的にもつける必要があるのではないかと、というところに注目して、こういう議論をつくってきたわけです。

### 農林業、水産業の重要な役割

なかでも農林業、水産業の役割は非常に重要だと思います。中越大地震のときに新潟県に行って、県からこういうデータ（資料12ページ中段の表）をもらいました。耕作放棄地が右に行けば行くほど高くなる。そうしたら地すべり発生危険度は高まりますよと。山古志村は、養鯉池をはじめとする素晴らしい景観で有名でした。これが地すべりのために崩れてしまう。耕作放棄地が周りに広がってしまうと、大規模な集中豪雨あるいは地盤災害のために一気に崩れてしまつて天然ダムができ、それが大崩壊して、全村避難となってしまいました。

仮に耕作がずっと続いていくことで保全されていけば、そういう危険を事前に予防することができる。こういうことをこのデータは示しているのです。

市町村合併が終わった2012年の人口規模別市町村一覧（資料12ページ上段の表）を見てほしいのですが、今、地方創生政策の一環として連携中枢都市圏を育成しようと人口20万人の都市に行政投資を集中すべきだと政府は言っています。私はこれは間違いだと考えています。なぜかという、20万人以上の都市の人口比率は確かに5割を超えます。けれども、面積でいうとわずか1割なのです。私は京都市民です。800km<sup>2</sup>の大半は山間地です。そういう所も含めて、わずかしか保全できていない。人口10万人以下、ここが圧倒的に国土保全の役割を果たしている。ここへの投資を引き上げる必要があります。というのも、今、災害が続発しているなかで、山の保全、川の保全、農地の保全が必要になってきているからです。

皆さんの取組みの連携を少し広げていくと、大都市部と皆さん方の湿地のある市町村との連携、あるいは流域圏での連携もしていくことが必要ではないかと思います。

### Ⅲ 自然環境を活かした地域づくりの事例

#### 1)九州・由布院（現・大分県由布市湯布院） 中谷健太郎『由布院に吹く風』

いくつか、事例の話をしてみたいと思います。私がずっと通っているところのひとつに大分県の由布院があります。皆さんもおそらく行かれた方が多いと思います。ここも平成の大合併で、今は由布市になっています。もともと盆地であるということで、戦後初期に大分市内で化学工場をつくるための電源開発の拠点として、由布院盆地をダム湖にしようとしていました。それは困ると、当時の住民が反対運動をし、結果として残ったのです。その後、由布院町は湯平村と合併して、自治体の名称を湯布院町とします。

そこに1970年代に大分中部地震が起こって、由布院地区は、壊滅的な打撃を受けたと報道されます。そのときUターンで戻ってきていた、当時40歳代前半で、今80歳を超えている中谷健太郎さんと溝口薫平さんがいました。中谷さんは亀の井別荘の社長です。溝口さんは玉の湯の社長で、

日田にあった博物館の学芸員の仕事をされていた、植物や岩石にもものすごく詳しい方です。

### 「明日の由布院を考える会」による由布院の宝物探し

由布院をどうするか、経営の問題もあるので真剣に皆で議論していこうとなってきます。そこでつくったのが「明日の由布院を考える会」という組織で、『花水樹』という機関誌も出します。公民館のなかの学習組織でした。最初、地震に加え高速道路がつくられる話があり、自然が豊かな湿地帯が壊れてしまうのではないかと、「自然を守る会」として発足しました。ところが「自然を守る会」では旅館関係者の意見がまとまっていけないのです。そこで「明日の由布院を考える会」に名称変更して、由布院の宝物探しをしていくわけです。

まず、別府のようになりたくないという点で一致します。別府は当時大きなホテルや旅館があり、お客さんを囲い込んでいて、人が街に出ない。たとえ出たとしても男性客が風俗のお店に行く。その背後には暴力団の影がありました。女性は別府を嫌う。そこで別府とは全く違う温泉地づくりをやろうと、ドイツに調査に行き、女性が1人でも滞在できる自然を活用した温泉づくりをしようと、由布院のまちづくりを進めていきます。

### 「潤いのある町づくり条例」で守った由布岳の自然景観・農村景観

さらにバブル期にリゾートブームがあり、多くの資本が入ろうとします。そこで素晴らしい条例を考えていきます。1990年に湯布院町が制定した「潤いのある町づくり条例」です。当時、アメリカのサンフランシスコやシアトルで成長の管理政策が行われていると、東大の大森先生から教えてもらいました。日本の自治体として初めて成長の管理の考え方を採り入れて、開発したければ、未開発地に行きたくないと誘導しながら、開発が集中する地区は地域のルールを定め、高さ、色合い、大きさを厳しくする条例を制定したのです。

彼らの調査の結果、由布院の宝ものは、由布岳の自然景観、そして農村景観だということ確認できていました。いまの風景は自然にあるように見えますが、実は条例が守ってきたものです。

### 「泊食分離」で紹介し合う

もう一つ大きな要因があります。農地を守ろうとしたら、固定資産税が高くなった農地でも農業生産を可能にしなければなりません。由布院では由布院盆地でできた農産物を旅館や飲食店が比較的高い値段で買って、農家が再投資可能なようにしています。また、「泊食分離」ということで、泊まりと食事を分離して、できるだけ町に、昼、夜と食事に出してもらおう。B&B、ベッドとブレイクファースト（朝食）だけを出すスタイルをとっていきます。

それから互いにお客さんを紹介し合う。今年泊まった1万円くらいの旅館に置いてあるテーブルのメニューですが、例えば豊後牛を食べたかったらこういうところがある、そばを食べたかったらこういうお店があると紹介し合う。合併してデータが取れなくなり少し古いデータで恐縮ですが、湯布院町時代の最後の町勢要覧で、観光客数などのデータの動きがわかります。1990年はバブルの絶頂期で、95年は阪神・淡路大震災とオウム真理教事件があって、京都でも金沢でも観光客数が激減したのですが、湯布院町では増えていくのです。

そして湯布院町の農産物を町内で購入して加工する。飲食店に回すことをしてきました。その結果、農業粗生産額も製造品出荷額も、商業販売額も右肩上がりになっています。コメについては昨年、1俵2万4千円で売っていました。そうすることによって農家の再生産が可能になる。そうすることによって農村景観が守られる。当然、コメも美味しい。合鴨米などを売ってました。補助金なしで3,000万円を販売する農家も出てきました。

### 地域内での産業連関という強み

こうすることで、地域内に付加価値が循環していくことが起こってきます。大分県の委託調査に私も参加してどれくらいの波及効果があるか、2004年に調べました。これが観光客の消費額です。ほぼ2倍の波及効果があり、町の総生産のだいたい6割くらいが観光を起点にしていました。30年、まちづくりをしてきた結果です。

もうひとつ注目したいのは、付加価値の市外流出が極めて少ないことです。別府市と湯布院町の職種別の電話帳を見ると、観光関連の職種の数は湯布院の方が多かったのです。旅館が残っていますから、畳屋、建具屋などいろんな職種が残っていて、産業連関をつくっていく。こういうところに1つの特徴、強みがあるのではないかと思います。

### 記録に残すことが次の世代をつくる鍵

「明日の由布院を考える会」がとても大事だと思ったのは、必ず記録に残すことをやってきたことです。これを今、40歳代から20歳代の若手が読んでいます。由布院の地域資源をしっかりと専門家に聞いたり、滞在している九州大学の先生にインタビューしたりして、活字として残していく。それが次の世代をつくっていく鍵ではないかと思います。

そういう試みがありましたが、2016年4月に熊本地震の連鎖で、由布院も再び震災に襲われます。由布院にはたくさんの観光客がインバウンドで来ていますが、なかなか地域づくり、地域に波及効果が出なくて、外からの業者が増えました。震災を機に、由布院の地域づくりの原点をもう一度探ろうという取り組みが始まりつつあります。

### 2)宮崎県綾町の森・水・人、有機農業を基盤にした地域づくり

もう一つの事例は宮崎県綾町です。綾町は宮崎空港から車で40分くらいでしょうか。郷田実さんという方が町長になられたときに、林野庁が照葉樹林に手を入れて開発しようとした。直感的にこれはおかしいと考え、郷田町長たちは運動して止めます。そのときに県立図書館にある山と川に関わる文献を全て読んだそうです。そのように科学的根拠を得ながら、保全するという取り組みを始めていきます。森を保全することによって水がきれいになります。そうすると土がきれいになってきます。そしてそこに有機野菜を植えていこうと。全国で初めて、町独自の条例を定めて、有機野菜の認証制度をつくり、検査所を設けます。金・銀・銅ラベルをつけ、東京や福岡の生協と直取引をしていきます。こうすることによって農業が活性化していきました。

### 住民一人ひとり、自覚する人が生まれる公民館活動がベースに

実は、綾町の取組みも公民館運動がベースにありました。大分県の「一村一品運動」の10年前に、「一戸一品運動」をしていました。1つの家で本当のもの、自慢のものを1つつくっていこうと。農産物でも手芸品でもいい。「ほんもの手づくりセンター」という直売所をつくって交換し合うことを始めたのです。それもかなり早い時期です。今の直売所ブームの先駆けです。

土と水がきれい、農産物が安全であるということで雲海酒造が町外からやってきます。これはお酒のテーマパークです。焼酎だけでなく日本酒、ワインも扱っています。原料はすべて綾町産です。酒仙の杜は宿泊施設にもなっていて、プロ野球、実業団、サッカーチームがここで合宿を行います。こういう合宿拠点が町内にあるわけです。そうすることによって地域内で循環がさらに強くなっていきます。有機野菜をつくることによって地域を元気にしていく。

綾町は、かつて「夜逃げの町」と言われました。ダム工事が終わってお店に客が来なくなって

夜逃げする人が多かったそうです。ところが今は、照葉樹林を活かして水をきれいにして土をつくり、有機栽培を奨励することによって人口が増える町になってきています。2012年には「ユネスコ・エコパーク認定」を受けています。照葉樹林を守ったことが世界的に注目されたからです。

私は、やはり公民館運動はすごいと思います。町が旗を振っても動かない。住民一人ひとり、一戸一戸、自覚する人が生まれるような自治的な公民館活動がベースにあると思います。

### 3)北海道別海町での湿地を活かした地域づくり

北海道別海町の野付湾と風蓮湖は、ラムサール条約登録湿地としても認定されているところです。香川県と同じくらいの面積に1万5千人しか住んでいないのですが、12万頭の牛がいます。日本最大の酪農の町です。

ここでの問題は、牛が出す排泄物です。1年間に北海道民全員が排泄する量とほぼ同じ量です。これと風蓮湖あるいは野付湾の水質、漁業をどのように共生、互いに連携をとりながらうまくやっていくのが、課題でした。「森は海の恋人」運動が気仙沼などではありますが、その前からここでは、野付湾に流入する川ごとに森・川・海をつないで森林組合、農協、漁協、学校が水の管理をする取り組みをしてきました。その結果、水質が管理されました。ドイツから技術導入して大規模なバイオマス施設もつくりましたが、これは失敗しました。日本の気候に合わせた別海の独自の技術としては不安定なものでした。

### 利益率の高い「マイペース酪農」

同一の施設を独立行政法人化しても、うまくいかない。農協の一部の人たちがやったけれど、うまくいかなかった。そこで、私が注目したのは「マイペース酪農」です。これはすごいです。森高牧場でお話を聞きました。ホタテなどの貝殻を使って自然力を活用した浄化装置をつくったら、ものすごく効果があった。牛は50頭くらいです。JA指定の飼料を使わず、牧草地に生えている草を食べさせることによってコストカットができる。牛も人間も無理せずやっていける酪農です。しかも600、800頭くらいの大規模経営と同じ利益額が出ていますから、利益率は、「マイペース酪農」の方が格段に高い。乳質も高い。こうした取り組みがこの地域でなされています。併せて野付湾、風蓮湖の水質管理にも寄与しています。

漁協の話を知ると、ホタテや鮭の売り上げがすごいです。ここは国後島との間の海峡の関係で、海流に鍛えられた大きなホタテができます。おいしい地域の食材です。「うたせ屋」という旅館がありますが、打瀬舟は油を湾に流さない、かつ風情がある情景で人気があり、お客さんがやってくるということがあります。

この町では中小企業振興基本条例があり、その政策の対象として農業法人や漁業関係の会社も入っています。そして医療や福祉、環境も中小企業として元気になることによって、互いに連携しながら保全できる。産業政策のなかに環境政策を入れていく。別海町では、こういう取り組みをやっているわけです。

## IV グローバル競争に左右されない個性あふれる地域経済・社会の再構築と自治体の役割

### 1) 地域資源を見だし地域内再投資力を高めることが決定的に重要

今の時代はグローバル化と災害の時代であると私は考えています。グローバル化により、これからは競争は激しくなっていきます。価格だけの競争をしていると、地域にとってもっと厳しい競争になっていきます。私は個性こそがグローバル競争の時代だからこそ必要になってきていると思います。そこにしかない資源、そこにしかない商品をつくり、さらにそこにしかない観光資

源に磨きをかけていく。そうすれば価格競争という互いに破壊的な競争をする必要がなくなってきました。先進国と途上国、大都市と農山村とが共生し合いながら、互いに個性が違う商品、つまり経営学でいうと差別化された商品、サービスを交換し合えばいいのです。交換することによって共生、交流が持続できるわけです。

### **湿地を活かし成果を地域の産業につなげることで地域が発展する**

自然資源としての湿地を活かしながら、その成果を地域の産業につなげていく。そうすることによってそれぞれの地域が個性的に発展していく。こういうことが今後戦略的に必要になっているのではないかと思います。宝ものをしっかりつかみ、それを自治体が施策として育成し、保全することで地域の企業体や住民と連携することが大事です。

中小企業振興基本条例は、今、400自治体を超えて広がっています。私は2週間前に大崎市でこの話をし、先週は山形市でこの話をしました。条例をつくっているところは、どう活かしていくかという話です。条例をつくっていないところは、産業だけでなく環境保全や福祉、医療も含めた形で地域全体をどうするかという基本的な考え方を理念として明らかにした条例を制定していきませんかと提案しています。

### **2) 企業のネットワークづくりと、産業と生活、環境をつなぐ地域内産業連関の重要性**

自治体だけが頑張るのではなく、企業が頑張っていく必要がある。その際に、産業の間だけでなく福祉や医療との関係も必要だと、さきほど言いました。

京都府の与謝野町は天橋立の近くの町で、中小企業振興基本条例をつくったときに、福祉法人の方々にも参画してもらいました。「よさのうみ福祉会」は養護学校の卒業生の次の仕事をつくってほしいと、いろんな仕事を開発して広げてきました。

NHKの教育テレビで1、2か月前に報道されましたが、「リフレかやの里」に障害者の子どもたちが入って昼食サービスと宿泊サービスをしています。横には農産加工場があります。とてもおいしくて、丁寧につくられていると評判で、大阪や神戸からもお客さんが来ています。番組でも紹介されていましたが、障害者の賃金は京都府の最低賃金に近くなってきています。食材は地域の農家から調達しています。地域のなかにいろんなサポーターも存在しています。高齢化のなか、工場を誘致しても撤退するかもしれないけれども、こういう福祉施設は撤退しないだろうと町は支援しています。様々な障害者年金も含めて地域で循環する。これを地域づくりの種にしていこうということになってきています。

### **3つの循環——お金、自然と人間の代謝関係、社会関係**

地域の循環については、由布院の例を考えるといいかと思います。農業では、原材料があり、そこに付加価値をつけ、これを加工業者が買い取る。それを小売店が販売すれば付加価値が地域内で蓄積されていきます。付加価値は1年間でこれだけになります。農産物をそのまま出荷してしまうと、地域内には付加価値はたまっていきません。付加価値全体を増やしていくためには、地域内でしっかりと取引を増やしていくことが大事です。

もう一つ大事なことは、市町村民所得には年金は入っていません。年金は新しい価値ではないという統計上の位置づけです。でも、現実経済では、「年金経済」という言葉があるように、年金は大きな役割を果たしています。京都府北部の集落を選んで40戸程度の農家を調査すると、集落の収入のほぼ9割が年金であることがわかりました。そういう地域は高齢化のなかで実際に多くなっていると思います。その年金の支出先のところで、福祉施設や病院など若い人の働く場がある。



そういう年金も活用した形で、高齢者から子どもまで安心して住み続けるような地域を足下からしっかりと事実を積み重ねながら行っていくことが大事ではないかと思います。

そうすると循環は、単にお金を回していく循環だけではない。お金を増やしながら回していきますが、人が自然に働きかけている。特に農業、林業、水産業は、国土保全の役割も果たしています。自然と人間の代謝関係が循環として存在しています。もう一つはそれを働きかけるような人と人との社会関係をつくっていくという循環があります。つまり、循環には、この3つがあります。

災害の時代においてはエネルギーの問題や食糧の問題が大きくなってきています。第二の循環です。また、昨日も「ほとりあ」でサポーターの方が子どものためにこういう帽子をつくって、鳥の種類を学ぼうとやっていました。サポーターの方の数がすごく多かったですね。あのような施設の運用のしかたを広げていくことも、第三の循環づくりもとても重要ではないかと思います。

### おわりに

地域のことをしっかりと学びながら、そこにいろんな情報がある。由布院の中谷さんは「ココ学」といいます。私たちは足下の地域のことを意外と知らない。ココから泉が湧いて、それをくみ上げながら地域づくりの運動や政策の素材にしていく。そうなれば学びが常に必要になる。公民館だけでなく、「ほとりあ」のような施設を活用しながら、次の世代の子どもたちも含めて地域を持続させていくような人材をつくっていくことが必要ではないかと思います。

大変駆け足でしたが、私の話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

**司会：**自然や個性を活かした地域づくりについて、また地域内の経済や人の循環について、全国の事例を基に岡田さんより講演いただきました。大変ありがとうございました。

続きまして、ワークショップにさらにつなげていくために、各地からの報告として、栃木県栃木市総合政策部遊水地課の深澤さんより報告をいただきます。では、深澤さん、よろしくお願ひします。

## 5. 各地域からの報告

### 報告 「市町村等連携による渡良瀬遊水地の取り組み」

栃木県栃木市総合政策部遊水地課 副主幹 深澤 剛

栃木県栃木市総合政策部遊水地課の深澤と申します。本日はこのような事例発表の機会をいただき、誠にありがとうございます。私からは渡良瀬遊水地の取り組みについて、前半で遊水地の概要、後半でラムサールカードづくり等を含めた地域連携の取り組みについてご紹介させていただきたいと思っております。

#### 渡良瀬遊水地の概要



はじめに渡良瀬遊水地の概要をご紹介します。渡良瀬遊水地は関東平野のほぼ中央に位置し、茨城、栃木、群馬、埼玉の4県、4市2町にまたがる南北9km、東西6km、面積3,300haの国内最大の遊水地です。

渡良瀬川と巴波川、思川の3河川が渡良瀬遊水地に流入して、下流約4kmいったところで利根川と合流します。渡良瀬遊水地は、渡良瀬川をはじめとする3つの川の他に、葉の形をした一番大きい第1調節池と、猫の顔の形をした第2調節池、鳥の頭の形をした第3調節池という3つの調節池、ハートの形をした1つの貯水池で構成されています。

遊水地の中に2つのゴルフ場があることも特徴の1つです。

#### 治水と利水について

渡良瀬遊水地は、治水と利水の2つを目的につくられたものです。平成27年の関東東北豪雨のときには、各地に甚大な被害が出ました。渡良瀬遊水地では8,600万 $\text{m}^3$ を流入しました。これが豪雨のときの流入状況です。総貯留量が1億7,000万 $\text{m}^3$ ですから、8,600万 $\text{m}^3$ の水を溜めても、約半分くらいの余裕があることになります。

このゴルフ場も完全に水没している状況です。ハート型の渡良瀬貯水池、通称谷中湖は平地のダムとして関東1都4県に都市用水を供給しています。平地のダムのメリットとしては、山間のダムが供給地に約2日間かかることに対して、平地で供給地に近いこともあり、何かあった場合に約5時間で供給できるというメリットがあります。

渡良瀬遊水地の造成については、110年前の明治41年に遊水地化事業が始まり、90年間をかけてこうした形になりました。

#### 自然環境

渡良瀬遊水地では1世紀にわたる年月をかけて、面積の半分、1,500haにヨシを主体とする湿性草場が広がり、希少種を含む豊富な植物種が生育するようになりました。これまでに渡良瀬遊水地のなかでは約1,000種類もの植物が発見されていますが、そのうち60種類が絶滅危惧種に指定さ

れています。

また、猛禽類の越冬地やツバメのねぐらとして利用されていることから、国内の登録地ではめずらしい人工の湿地として、平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録されました。面積3,300haのうちゴルフ場と運動公園を除いた2,861haが条約湿地になっています。

最近では千葉県野田市で放鳥されたコウノトリが採餌する光景がみられるなど、豊かな生態系を保っています。

渡良瀬遊水地の自然環境は、人々の働きかけによって保たれてきたものも多くあります。その1つがヨシ焼きです。ヨシ焼きは地場産業であるヨシズ生産に必要な良質なヨシを育成するために、昭和40年代から組織的に行われてきました。枯れたヨシを燃やすことによって春先の小さな植物の発芽を促したり、ヨシ原を利用する野鳥にねぐらを提供したりするなど、今では湿地環境の保全に重要な役割を担っています。

### 地域連携による取り組み

平成25年8月に「湿地の保全」と「湿地の賢明な利活用」を図るため、治水機能の向上と継続的な自然環境の保全および利活用の促進に関し、関係機関及び周辺の住民等が十分に協議を行うため、渡良瀬遊水地保全・利活用協議会を設立しました。

協議会には4つの部会を設け、2か月に1回の頻度で、テーマを定めて、テーマを実現するために検討を行っています。協議会ではこれまでに環境を保全し、来訪者が安全に遊水地を利用できるよう、マナーパンフレットの作成や、小学生を対象とした教材づくりを行ってきました。本日は皆さんにマナーパンフレットをお配りしましたので、後ほどご覧ください。

### 登録5周年を記念して作成した「渡良瀬遊水地ラムサールカード」

平成29年には登録から5周年を迎えた記念事業として、シンポジウムの開催や遊水地のロゴマークの公募、そして今回ご紹介する「渡良瀬遊水地ラムサールカード」を作成しました。「渡良瀬遊水地ラムサールカード」は5周年の周知や構成する自治体のPRを含め、遊水地周辺を周遊してもらうことを目的に、既に配布していたダムカードを参考に作成しました。ラムサールカードについては、国土交通省と4市2町それぞれで作成し、全7種類にダムカードを合わせ、計8枚でコンプリートという形になります。また、3枚目をお渡しするときに、8枚入るカードケースを一緒にお渡ししています。

ラムサールカードについては、栃木市の例として、表面に渡良瀬遊水地の風景と熱気球の写真、裏面の左半分は栃木市の他の観光地のPR、右半分は共通データとして渡良瀬遊水地の概要を示しています。

### ラムサールカードの配布場所

ラムサールカードの配布場所は、遊水地を含めておおむね1日で周辺市町を周遊することを想定して決めました。遊水地にある活動拠点施設で国土交通省が作成したカードを配布し、周辺4市2町の施設6か所で、それぞれの自治体が作成したカードを配布しました。

この取り組みについては、4市2町をはじめ関係機関のホームページでも発信しましたが、新聞を中心にメディアにも取り上げられ、多くの方に来ていただくことができました。このグラフ（資料18ページ「反響と効果」）は遊水地でカードを配布した施設の28年度と29年度の月ごとの来場者数を示しています。「体験活動センターわたらせ」は遊水地のなかにある施設です。カード配布前の4-6月については、28年度の方が多いですが、配布後は各月とも29年度の方が多

くなっており、カード配布による効果であったと思います。10月は台風の影響で前年度比では少なくなっている状況です。

### 周辺観光施設への誘導

配布する施設によって様々な効果が得られたと考えています。野木町の「野木ホフマン館」には、隣接して「旧下野煉瓦製造会社煉瓦窯」があります。煉瓦窯は、かつて遊水地内で採取された土を使った煉瓦が使用されており、国の重要文化財となっています。

同様に、加須市の「北川辺スポーツ遊学館」には道の駅も併設されていて、全国的にもめずらしい三県境があります。歩いて3歩で回れる三県境が施設から徒歩圏内にあることから、配布場所と近くにある観光名所を誘導することができました。

このように、観光消費の促進として道の駅や各種情報発信の場所でのラムサールカード配布は効果があったと思っています。

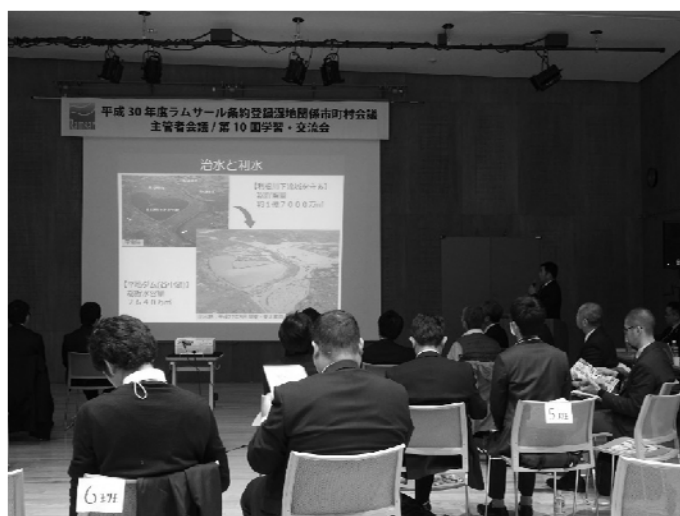
### 課題

ラムサールカードは登録5周年記念事業として一定の成果があったと考えていますが、振り返ってみますと、残念な課題も見えてきました。このグラフ（資料18ページ「課題」）で施設5と6を比べると、配布状況に2倍以上のばらつきがありました。要因としては開館時間が異なっていたことや休館日の影響もあったと思います。ラムサールカードを配布する際には、そういったことを踏まえてあらかじめホームページ等で紹介したのですが、結果的に2倍以上のばらつきが出るという結果になってしまいました。

当初の想定よりも効果は大きかったために、配布する施設や周辺の観光施設とより積極的に連携をはかることによって、効果はさらに大きくなったのではないかと考えています。保全利活用協議会では、遊水地の保全と利活用はもとより、周辺の地域の活性化を図ることが求められていますので、今回の取り組みを実例として今後活かしていきたいと考えています。

以上で渡良瀬遊水地の取り組みの紹介を終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

司会：深澤さん、ありがとうございました。それでは一度休憩を挟みまして、次のグループワークにすすみたいと思います。



## 6. グループワーク

### 1) 第1クール

テーマ「大山上池・下池の魅力」

①グループごとの自己紹介

②前日の大山上池・下池で気づいたこと、感じたことを「えんたくん」にメモし、発表しあう

朝岡：これから20分ほどかけて「えんたくん」を使ってワークショップをします。「えんたくん」は、四角い模造紙に書くのとは違って、直接、円の模造紙にどんどん書き込んでいくというやり方です。人数によって書き込める範囲は違いますが、自分が言いたいことやキーワードを書いて、他の方がお話をされていることを聞いて「これはいい」と思ったら書き込んでいただく。場合によっては他の人が書いたものに丸を付けたり、線を引いたりしてもいいかもしれません。とにかく自由に書き込むところに特徴があります。

それではこれからリーダーの方に進行をお願いしますが、最初にグループのメンバーで簡単な自己紹介を1人30秒くらいでやっていただきます。昨年同様、チンと鳴ったら次の方に代わってもらってください。それでは各グループの方、簡単に自己紹介をお願いします。

<自己紹介>



朝岡：はい、ご苦労様でした。これで皆さん、仲良くなれたと思います。これからもっと仲良くなってもらいます。これからリーダーの方に進行をゆだねます。昨日見学していただいた大山上池・下池を題材にカードをつくりますので、魅力、つまりカードに載せたいようなキーワードを皆さんに話し合ってください。議論することが目的ではありませんので、「こんな魅力も

あったか」と共感したり、あるいは発見したりしていただくことがポイントです。気楽なつもりでそれぞれメモしながら、自分のところだけメモするのではなく、他の人のもいいと思ったらメモしてください。そういう形で魅力を共有したいと思います。

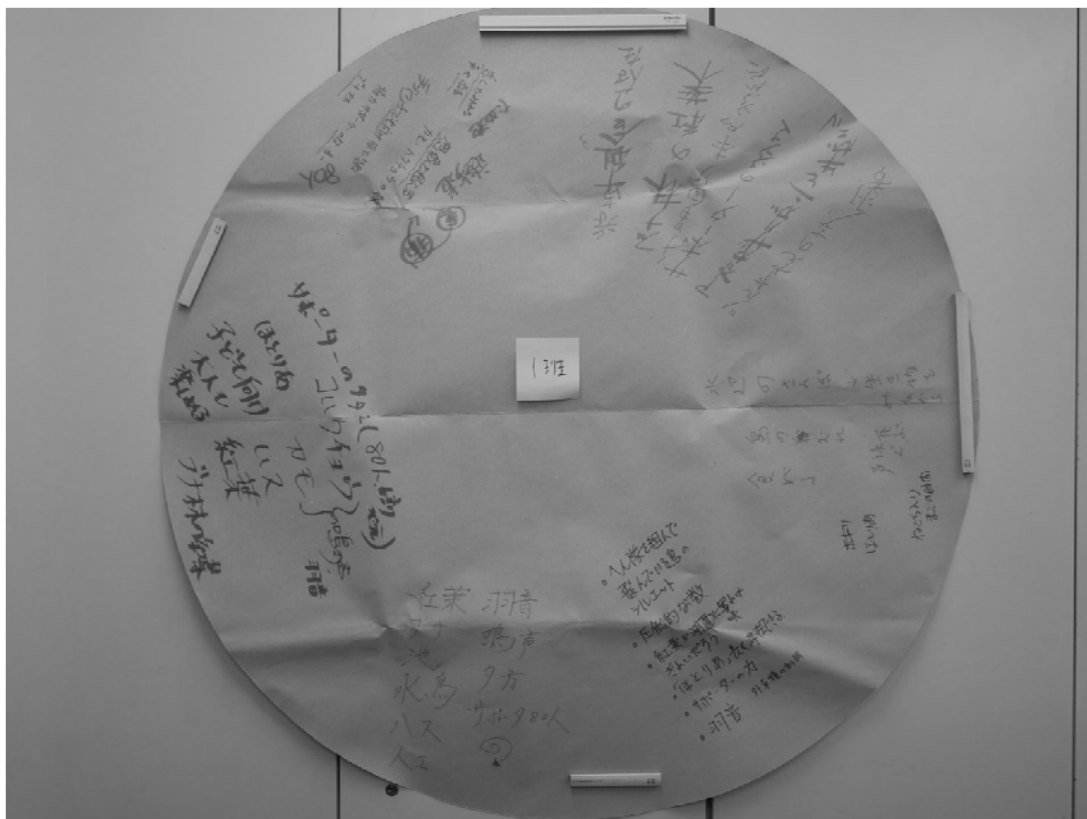
それではリーダーの方、よろしくお願いします。

#### <大山上池・下池の魅力を共有>

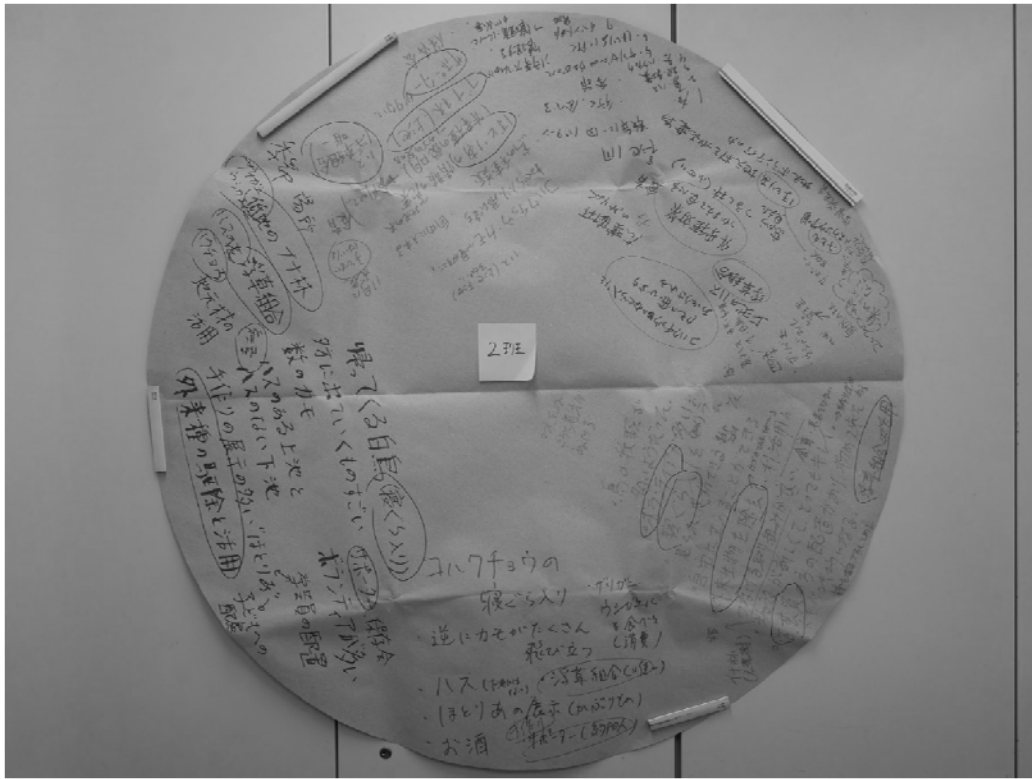
**朝岡：**はい、お疲れ様でした。それでは一度このグループは解散させていただきます。リーダーの方だけが残って、他の方は他のグループの空いている椅子に座ってください。「えんたくん」は下ろしていただいて、ペンは自分でもって行ってください。リーダーの方は、人数がそろったら膝の上に「えんたくん」を乗せてください。くれぐれも同じグループに居残らないようにお願いします。だいたい5、6人で1グループになるようにしてください。時間がないので、あまり自治体を気にしないでください。

人数がそろったら、さきほどの「えんたくん」を膝の上に乗せてください。これからリーダーの方にやっていただくのは2つです。メンバーが替わりましたので、お一人30秒ずつ自己紹介をしていただきます。その後、リーダーの方は先ほどのグループで何が魅力として挙がったのか、できるだけ簡潔に新しいメンバーにお伝えする、この2つのミッションがあります。では、よろしくお願いします。

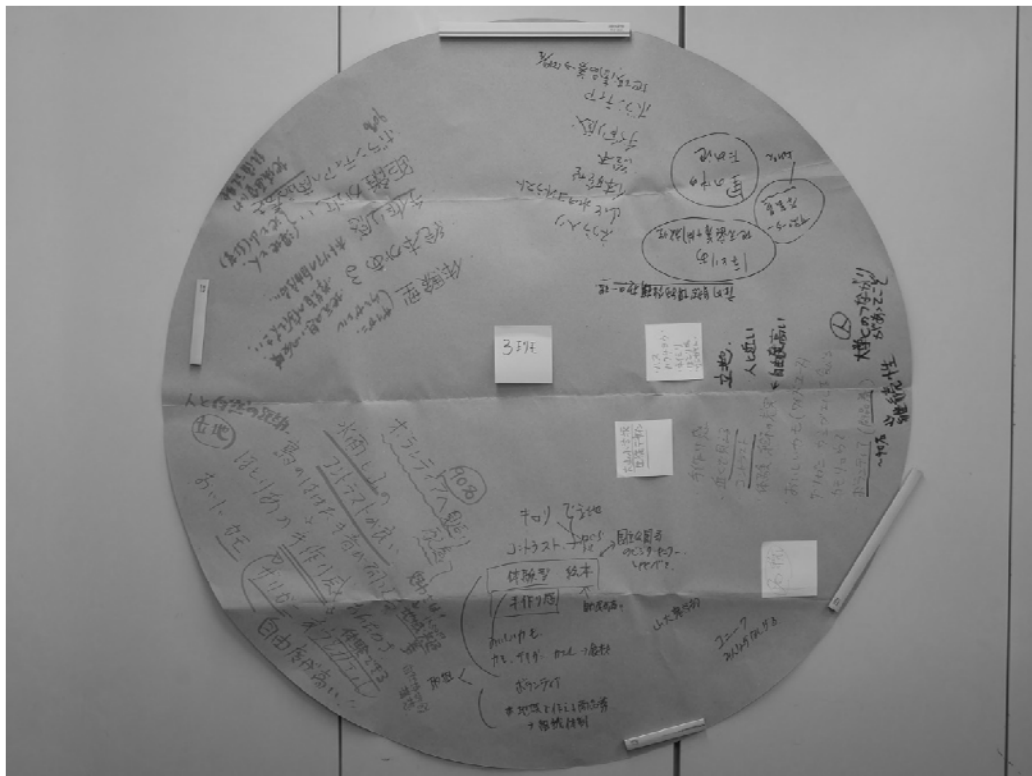
**1 班：**○野木町・小林大輔、釧路市・船木豪志、豊岡市・宮下泰尚、屋久島町・内田大信、ラムサール・ネットワーク日本・金井裕、京都大学・岡田知弘



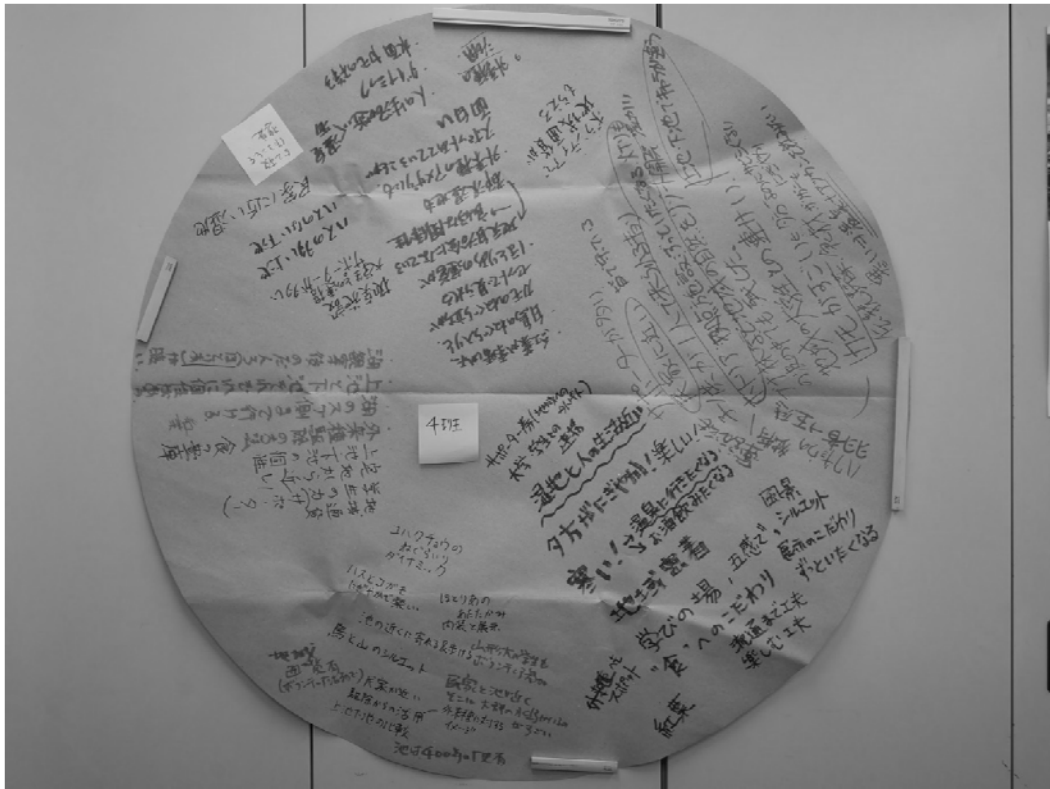
2班：○荒尾市・中山和也、三沢市・吹越昭彦、習志野市・永田悦朗、豊岡市・酒井進丞、ラムサールセンター・大村弥加、WIJ・名執芳博



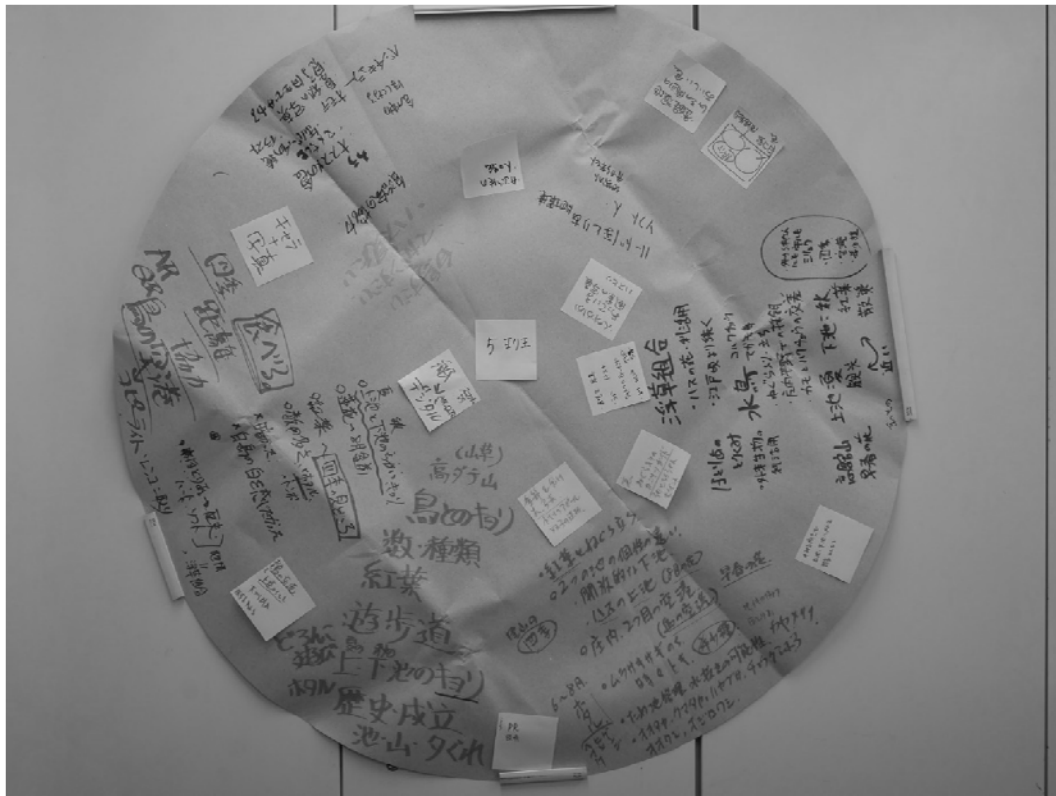
3班：○美祢市・篠田健二、登米市・菊地純平、鶴岡市・鎚谷知朗、新潟市・小林博隆、那覇市・佐々木整、ラムサールセンター・中村玲子



4班：○大崎市・三宅源行、栃木市・深澤剛、加賀市・田中悠貴、鹿島市・中村龍馬、南三陸町・阿部拓三、ユースラムサールジャパン・早坂和希

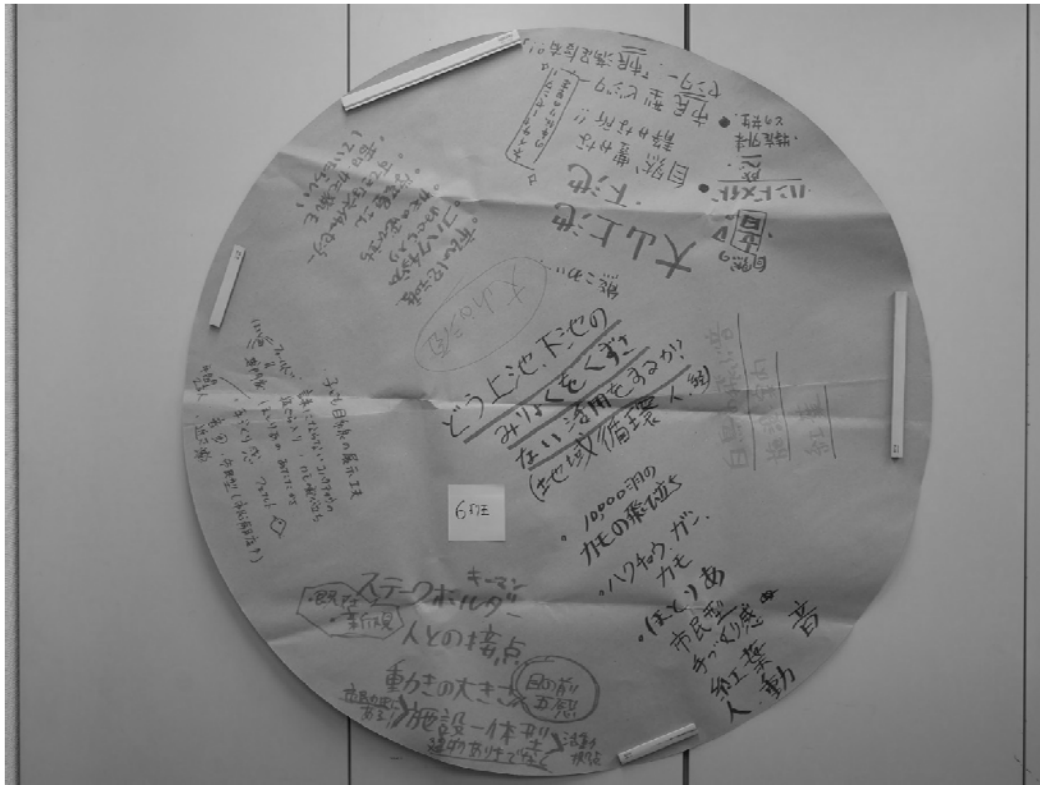


5班：○若狭町・上下勝、鶴岡市・佐藤英世、小山市・大谷亮介、佐賀市・成富典光、南三陸町・庄田幸広、環境省・堀上勝

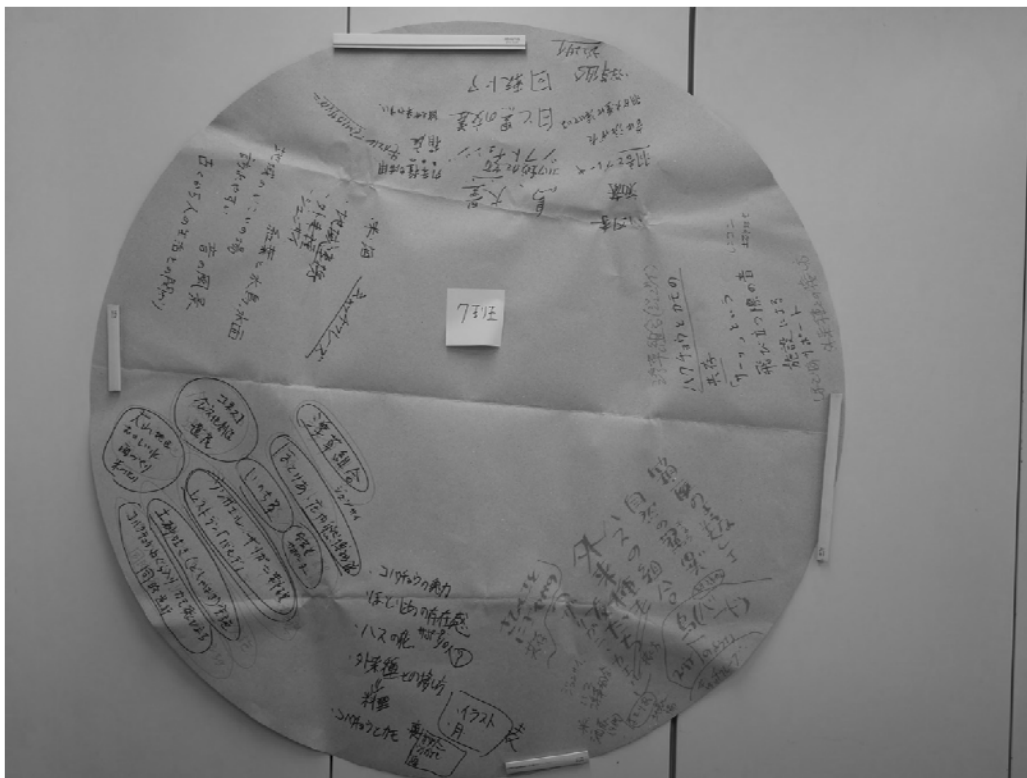




6班：○小山市・武田浩伸、大崎市・鈴木耕平、豊田市・近藤裕、荒尾市・中村安広、日本野鳥の会・大畑孝二、環境省・山岸由佳



7班：○野木町・小泉晴雄、大崎市・千葉薫、近江八幡市・大橋諒久、九重町・竹尾孝一、法政大学・笹川孝一、環境省東北・石場理紗



## 2) 第2クール

### テーマ「湿地カードのデザイン」

**朝岡：**はい、それでは新しいメンバーのお名前や属性がわかったところで、いよいよ作業を始めます。最初にリーダーの方は、目の前の「えんたくん」を見ながら結構ですので、「前のグループではこんな意見が出た」ということを他の皆さんに5分以内で説明してください。

聞いておられる方は「これ、いいな」と思ったら、書き込んでいただいて結構です。それではリーダーの方、よろしくお願いします。

**朝岡：**はい、ご苦労様でした。これでだいぶ情報共有ができたと思います。この後の作業は難易度が高いのですが、さきほど「渡良瀬遊水地ラムサールカード」を紹介いただいたので、だいたいのイメージはわかると思うのです。これは表と裏があります。こういうデザインを、大山上池・下池を題材にして皆で考えることがポイントです。

せっかく仲良くなったので、このまま「えんたくん」を使ったらいいのではないかと思います。皆さんのお手元には四つ折りにした模造紙があります。とりあえず二つ折りの状態で半分だけ使ってください。そうすると片面が横になります。これがカードの表、残りのこちらが裏。目標としては、カードの表と裏のデザインを皆さんで話し合っつけてください。なぜ半分の大きさにするかというと、「えんたくん」に乗せやすいこともあります。失敗する、デザインを変えたいと思ったら裏を使ったらいいと思います。見栄えするようにつくってもらわないといけませんので、修正時間も含めて20分をお願いします。

たとえば上池・下池の写真を大きく1面で使う場合には、真ん中に置いて1面全部と矢印を広げると、そういうイメージだとわかります。ただ、それはおすすめではありません。大事なことは、ユニークで皆が欲しがるといえるようなカードのデザインを考えてください。柔軟に発想しないとパターン化してしまいますので、載せる情報も含めて、楽しくなるような、欲しくなるようなカードのデザインをしてください。

もう一つ、作業のなかでポストイットもうまく使ってください。いきなり書き込むと移動できませんから、「こんなものを載せたい」と、リーダーの方の判断で先にポストイットに書いてもらって、ポストイットを移動させながらデザインをするというやり方もあると思います。非常に難しいことはわかっていますが、皆さん方ならできるだろうと思います。

約20分、忙しいですがリーダーの方の進行でよろしくお願いします。それでは始めてください。

**朝岡：**はい、ありがとうございました。この後順番に発表していただきますが、製造者責任を明らかにするためにポスターのどこかに皆さんのお名前を書き込んでください。本物のカードには使いません。名前だけで結構です。使っていない面、裏面でかまいません。

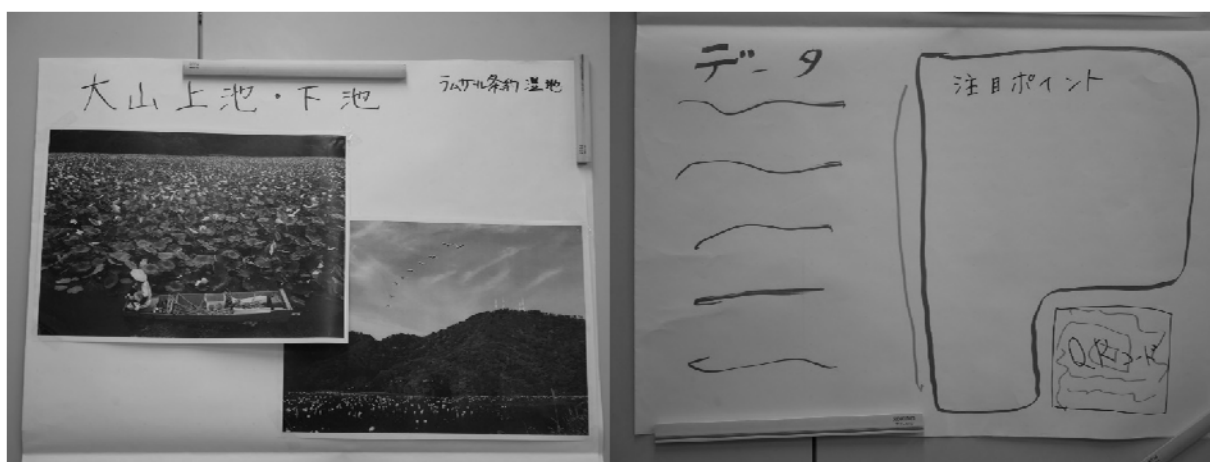
サインが終わったら、一度「えんたくん」を膝の上から下ろしてください。ポスターだけを持ってこれから順番に発表していただきます。皆さんが座っておられるところに立って、全員協力してポスターを他の班に見えるように掲げていただきます。リーダーが指名権をもっていて、指名された方が発表してください。指名していない場合はリーダーがやるしかありません。

では1班からお願いします。1班の方は皆さん、ご起立ください。制作者の顔をよく見てあげてください。それではこれから2分で発表していただきます。よろしくお願いします。

**1 班：**○野木町・小林大輔、九重町・竹尾孝一、南三陸町・庄田幸広、環境省東北・石場理紗、ラムサールセンター・大村弥加、ユースラムサールジャパン・早坂和希

1 班としては、表面は写真 1 枚か 2 枚かと話し合ったのですが、2 枚とも良い写真だと、2 枚載せることにしました。2 枚の写真の上と下の空欄の部分はザリガニとカエルのイラストを載せるかどうか、結論が出ませんでしたので、今回は取りやめとしました。

裏面はオーソドックスな形ですが、半分に切って左側に湿地のデータ、右側には湿地の注目ポイント、上池・下池ですからコハクチョウの飛来の時期やねぐら入りの時期を載せるのがいいのかなと思いました。右下に QR コードを付けて、コハクチョウのねぐら入りとカモのねぐら立ちの動画を見られるようにするといいいのではないかという意見が出ました。以上です。(拍手)



**朝岡：**ありがとうございました。続きまして、2 班の方、お願いします。皆さんに見えるように工夫してください。

**2 班：**○荒尾市・中山和也、大崎市・千葉薫、那覇市・佐久本整、環境省・山岸由佳、ラムサールセンター・中村玲子、ラムサール・ネットワーク日本・金井裕

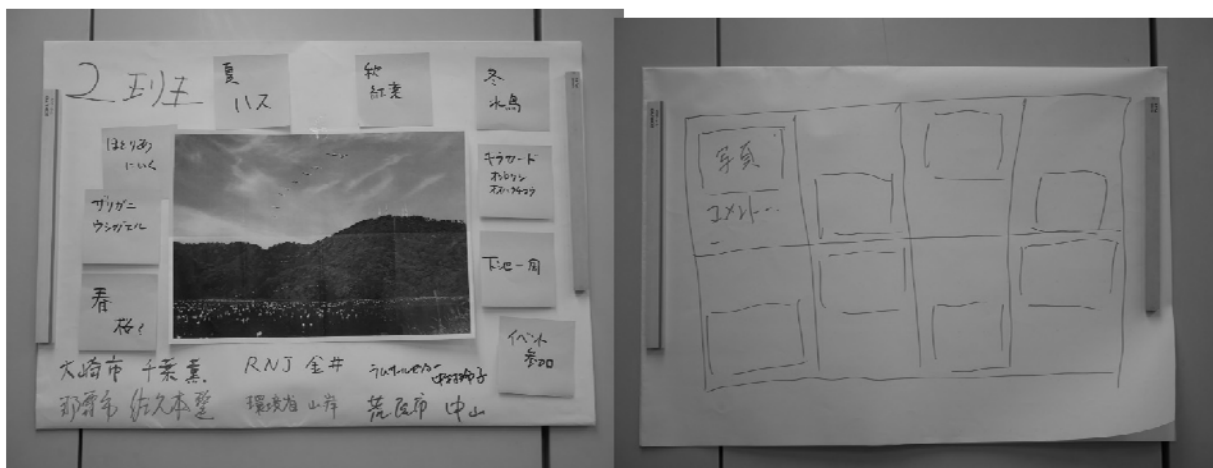
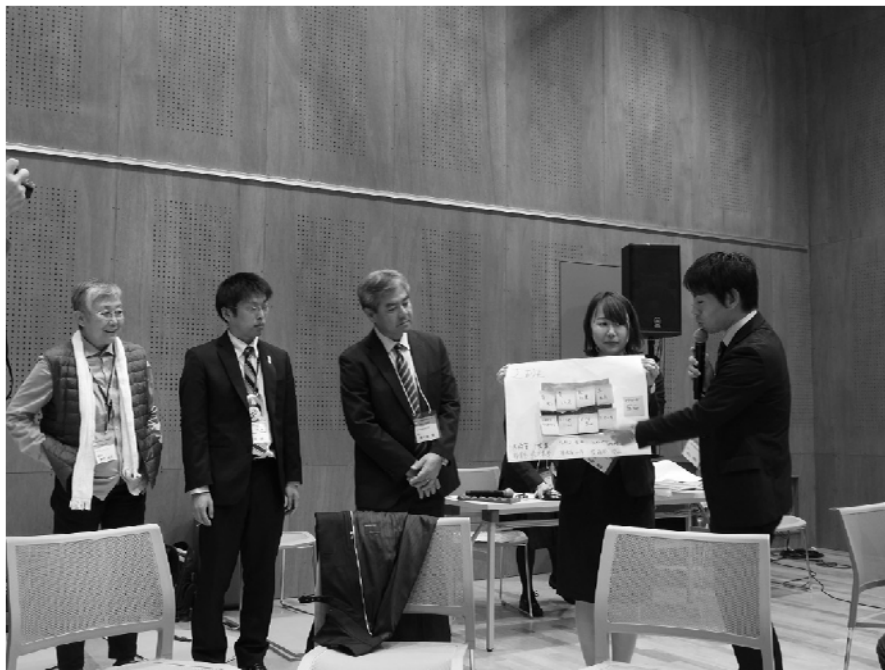
2 班では、周遊性とリピーターをいかに集めるかということに着目しました。カードが 8 枚そ

ろったらコンプリートの形にしました。春は桜が見えるのではないかと、夏はハスを見に行く、秋に紅葉を見に行く、冬に水鳥を見に行く。それ以外に、ザリガニもしくはウシガエルを食べると1枚。「ほとりあ」に行くと1枚。イベントに参加すると1枚。下池を一周すると1枚。8枚全部そろったら台紙をあげましょうと。

それからキラカードのようなレアカード。希少種のおジロワシやオオハクチョウを見たらステイタス、「もってるぜ、おれ」と、なるようなものをつくったらいいのではないかと考えました。

裏面は桜の写真とそれに対するコメント、夏はハスの写真とコメント。8枚集めたらOK。もしかしたら1年で集める人もいないかもしれないので、数年に1回、ネタを変えると新たにリピーターが来るのではないかという意見が出ました。

8枚そろったら、このようにきれいな景色ができますよというのが大前提です。(拍手)



朝岡：はい、ご苦労様でした。それでは3班、ご準備をお願いします。

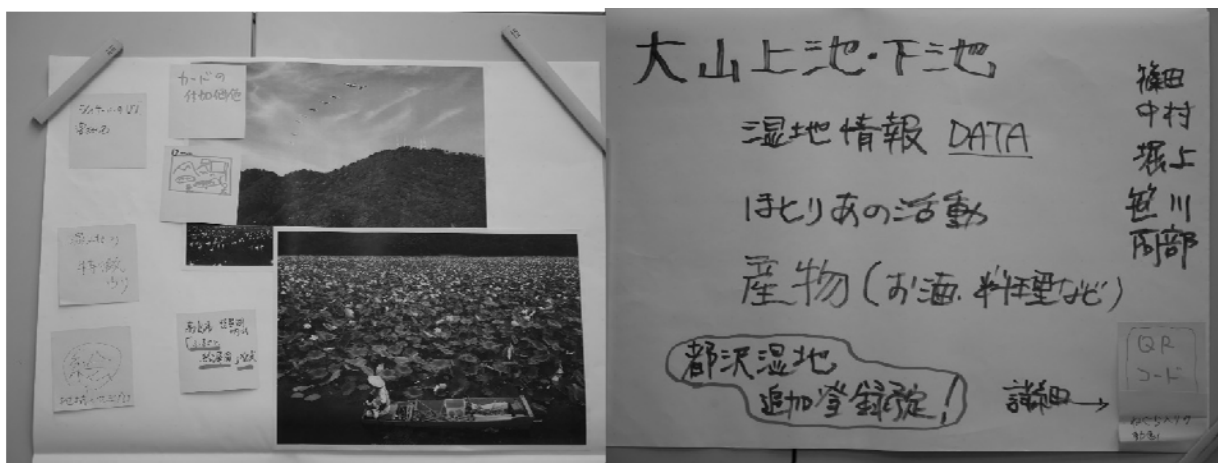
3班：○美祢市・篠田健二、荒尾市・中村安広、南三陸町・阿部拓三、環境省・堀上勝、法政大学・笹川孝一

全体的にはオーソドックスに表面はイラストです。高島市の「ふるさと絵屏風」のような感じで絵を描いていただく。写真では表面的なものしか表現できないのですが、上池・下池の特徴的

なものを絵で盛り込んでいく形です。ラムサール条約登録湿地ですので、ラムサールのロゴを入れ、湿地の絵を入れます。

裏面には湿地の名称、湿地の基本的な情報、「ほとりあ」の情報と、ザリガニやウシガエルを食べられ、お酒も美味しいということなので、売りになることを文字情報として入れたいと考えています。ねぐら入りはかなり迫力があり、魅力的だという意見がありましたので、その動画やきれいな写真の QR コードや URL 情報を入れた形になりました。動画は他では使わないここだけのオリジナルなものを使えばいいのではないかということになりました。

鶴岡市の知らないニュースですが、都沢湿地は追加登録できるという話があるので、登録予定と入れることも考えました。(拍手)



朝岡：それでは4班、お待たせいたしました。

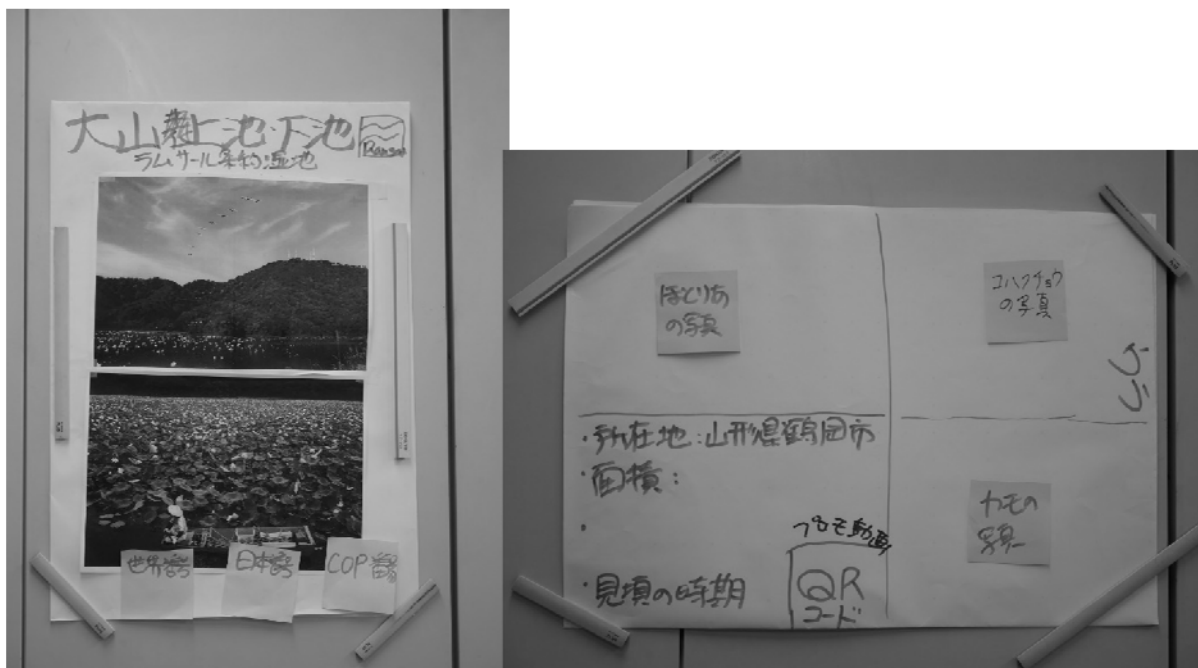
4班：○大崎市・三宅源行、鶴岡市・佐藤英世、豊岡市・宮下泰尚、日本野鳥の会・大畑孝二、WIJ・名執芳博

4班では、写真1枚では上池・下池の2つはキャラが違うので両方とも載せたい、できるだけ大きく載せた方がいいだろうということで、縦にしました。湿地名があつて、ラムサールのロゴ

はやはり必要だろうと。各登録湿地にわりふられている世界番号と、52箇所ある日本の登録湿地の日本番号、またいつのCOPの時に認定されたのか、COP9 同士だよとか親近感が湧くと思い、COP番号も載せたらいいのではないか。

裏面は横にしてみました。特徴的な生き物の写真をなるべく大きくして載せたいので、2枚。入場したいようなビジターセンターなどの拠点施設の写真。この場合は「ほとりあ」ですが、写真を3枚程度、カモ、コハクチョウといった生き物の写真と建物。小さくなってしまうのが難点ですが、基礎情報のところに見頃の時期やQRコードをと、皆さんの話を聞きながら、素晴らしいアイデアをいただいたところです。

11月10日が記念式典ですが、その場でQRコードにマッチするようなドローンを使った上池・下池のプロモーションビデオが公開されます。近日中にYou Tube等で公開できればと思いますので、皆さんにはメール等でお知らせします。(拍手)



朝岡：ありがとうございました。それでは5班、お願いします。

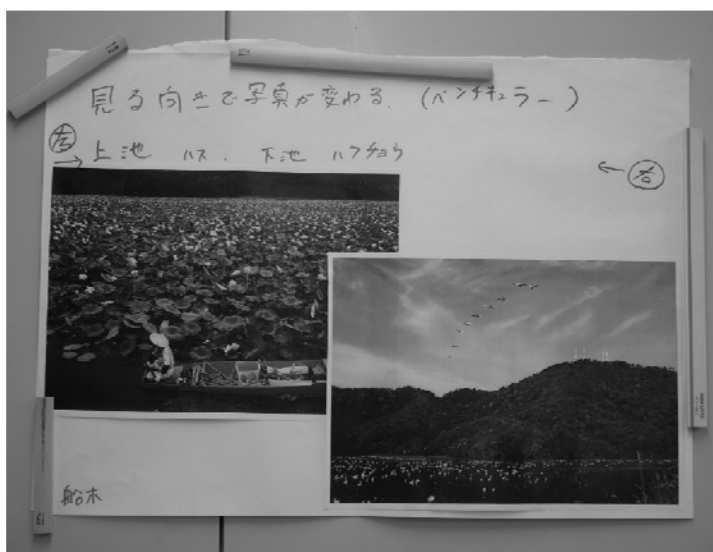
5班：○若狭町・上下勝、釧路市・船木豪志、習志野市・永田悦朗、新潟市・小林博隆、豊田市・近藤裕

5班の発表をします。たくさん良い案があつて、なかなか決められませんでした。表面については昨日、上池・下池に行つてすごく魅力があると。池が2つあり、四季折々だということでしたが、紙媒体は小さいので魅力を全部盛り込むのは無理だろうという話が出ました。名前と、インパクトのある「鳥の空港」というコピーを付けて、写真ではなくキャラクターにしようと思っています。ハクチョウとハスの花をもったような形で、詳細はQRコードによる動画。

もう一つ、AR（拡張現実）を皆さんご存じでしょうか。スマホを当てるとキャラクターが動き出すといった技術を使いながら情報を発信していきたいと思います。

裏面は、皆さんには上池・下池を楽しんでいただきたいので、右から見たら上池の写真が見えたり、左から見たら下池のハクチョウが飛んでいる姿が見えるベンチキュラーという方法でラムサールカードに載せたいと思います。

地元の方や若い人の活動がありますので、写真かイラストを入れたいと思います。定期的にメンバーが替わっていくので、定期的に更新すれば、カードも新しくなり、新しいカードを欲しくなるのではと思います。（拍手）



朝岡：ありがとうございます。それでは6班、お願いいたします。



**6 班：**○大崎市・鈴木耕平、栃木市・深澤剛、加賀市・田中悠貴、近江八幡市・大橋諒久、屋久島町・内田大信、京都大学・岡田知弘

6 班では地元貢献するという意味合いもこめて、ハスを素材にしてこのカードをつくれないうアイデアが出ました。QR コードやロゴの話もありましたが、私どもでは鳥の鳴き声を QR コードで聞けるようにして、聞いた声と実際に行って聞いた声が違うのかを体感してもらうのも 1 つの方法ではないか。写真については地元のなかで市民に提供してもらって、賞をつくってその年の最優秀賞をカードに盛り込めればと。

ラムサールマークを印字していいか、わからなかったのですが、カードのコレクション性ということで、日本の湿地全てのカードを集めるとラムサールマークになるように、裏面にラムサールカードはラムサールマークのこの辺ですよと盛り込めると、集める気になりますし、実際に行かないとカードをもらえないので、行くきっかけにもなるのではというアイデアが出ました。1 つ空いているところはアイデアが出なかったところなので、この湿地の特徴やマニアが喜ぶ生きものの情報を盛り込んでいけるといいのではという内容になりました。

このカードを持って行くと地域でクーポンとして使える、カードを見せると 1 割引きというアイデアも。QR コードで、クーポンが使えるお店の一覧表が見られるといった利用もあるのではという話になりました。(拍手)



**朝岡：**ありがとうございます。それでは最後、7 班、よろしくお願いします。

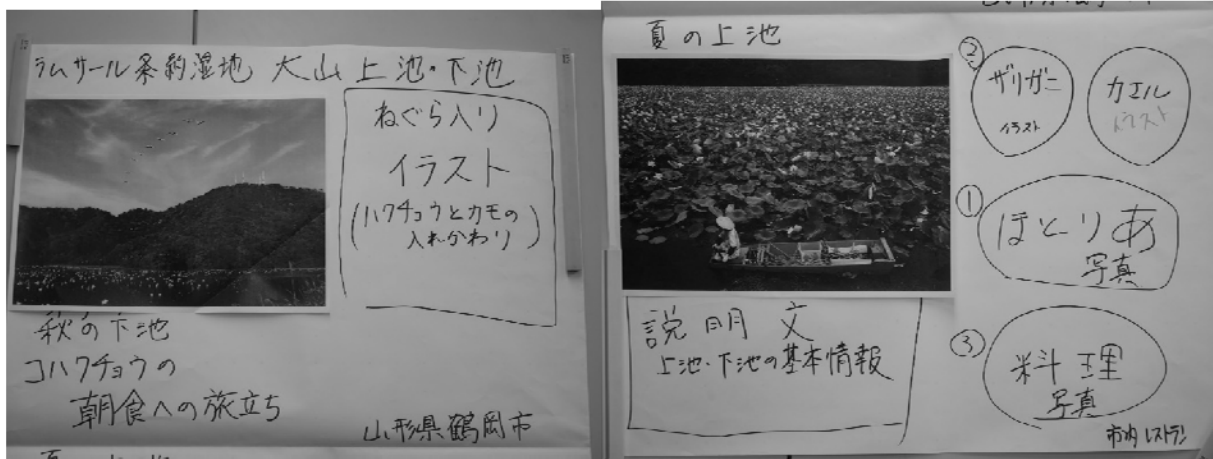
**7 班：**○野木町・小泉晴雄、鶴岡市・鎚谷知朗、小山市・大谷亮介、豊岡市・酒井進丞、佐賀市・成富典光

表面は大山下池の写真を半分くらいにして、キャッチフレーズを「コハクチョウ 朝食への旅立ち」として、皆さんに想像してもらいます。ねぐら入り、コハクチョウとカモの入れかわりを写真で載せたいのですが、写真を撮るのは難しいので、イラストで描ければと。キャッチフレーズ「コハクチョウとカモの入れかわり」として、ここに山形県鶴岡市の地図を入れます。

裏面には夏の上池にはハスがあるので、夏も魅力的ですという写真。右欄には「ほとりあ」の写真を入れて、その下に外来種であるアメリカザリガニとカエルのイラストと、カエルの料理の



写真を載せたい。写真には市内のレストランで食べられると入れます。最後に、説明文として基本情報も入れたいと思います。(拍手)



## 7. まとめ

**朝岡：**ありがとうございます。皆さん、限られた時間のなかでこの自治体会議の方は優秀です。こんなにしゃきしゃき行くのはめずらしいのです。今日も予定より早め早めに展開して、だいぶ余裕があります。

各班から発表していただいた内容を事務局に引き取っていただき、来年、どういう形で利用するか、考えさせていただきます。非常におもしろいアイデアをたくさんいただいたと思います。後はデザイナーを雇うことも含めて予算がつけば、このカードはかなりリアルなものになるかと思えます。楽しみにしててください。

それでは、この後はこのグループワークだけではなく、学習・交流会全体の感想を皆さんにお願いしたいと思います。基本的には参加された自治体の皆さんから感想をいただこうと思いますが、最後に三人の方だけ指名させていただきます。法政大学の笹川孝一さんから一言、岡田さんのところで十分に時間を取れなかったのが岡田さんから一言いただいて、最後に日本国際湿地保全連合の名執芳博さん。

いかがでしょう、感想を言いたい方はいらっしゃいませんか。誰も頼んでいないのです。それでは何名か指名させていただきます。久しぶりに市町村会議に参加された自治体ということで近江八幡市の大橋さん、ぜひよろしくをお願いします。

**大橋諒久：**近江八幡市役所環境課の大橋と申します。ラムサール担当になって今年で5年目になりまして、この会議に参加させてもらうのは初めてです。



いろんなお話を聞かせてもらっているなかで、皆さんが様々な取り組みをなさっているというのが正直な感想です。現地視察の際にもすごい数の鳥、素晴らしい施設も見せていただいて、充実した2日間になったと思います。

滋賀県では「琵琶湖」が本市の「西の湖」を含んで登録されているのですが、その「西の湖」の単独登録に向けて取り組もうということで、今回ここに来させてもらいました。実は退会も検討していたのですが、こんなにおもしろい研修、学習会があるのかと改めて感じましたので、今後、市役所内での協議の際に、「会員を続けていきたい」と報告したいと感じられるくらい楽しい会議と学習会でした。本当にありがとうございました。(拍手)

**朝岡：**来年か再来年にはラムサールカードができるはずですので、今辞めどきではないですね。ラムサールカードを作れなくなりますので。ぜひ市長にもよろしくお伝えください。どなたか、いかがですか。

**中村安弘**：今回初めて参加させていただきました熊本県荒尾市の中村と申します。このあいだ、KODOMO ラムサール九州で子どもたちが集まって、子ども達に有明海の魅力を話しました。市町村会議に初めて参加させてもらって、すごく気づくこともあったし、いま近江八幡市さんからいろんな問題を聴きました。これを皆が共有することによって、私たちができること。し続けたいという気持ちがあるのですでしたら、私たちも応援しましょうというスタイルが出来上がっていることが大きいと思います。私は地元に戻って地域の人たちや子どもたちにこの魅力をどんどんつなげていくスキルアップになったので、すごく良かったです。



南三陸町でも今度 KODOMO ラムサールがあるので、ぜひ皆さん参加していただければと思いますし、私も機会があったら参加したいと思います。楽しかったです。ありがとうございました。（拍手）

**朝岡**：ありがとうございます。荒尾市は海苔ということで、去年も大崎のお米と荒尾の海苔でラムにぎりをつくろうという話をしていた気がします。自治体間の連携でいろんな可能性が生まれるという1つのポイントだと思います。この会議もそういう方向に進んでいますので、ぜひ皆さんにもっともっとアイデアを出していただければと思います。他にいかがですか。

**阿部拓三**：南三陸町の阿部です。今回もオブザーバーとして参加させていただいているのですが、ぜひ会員に入れていただけたらと思っていますので、よろしくをお願いします。



昨日、鶴岡市の課長さんとお話したのですが、人的な交流、人的な流動性。私も中村さんも任期付職員として町にいますが、人材の流動性を高めるようなことがあれば、その人にとっても地域にとっても行政にとってもメリットがあるのではないかと考えています。こういったつながりを通じてシステムを構築していけたら全国的に貴重な財産や資源がどんどん発掘されていくのではないかと考えています。ぜひそういう方向でも議論していけたらと思います。今回、どうもありがとうございました。（拍手）

**朝岡**：こういう人のつながりが非常に重要だと前から言われていますが、確認できる良い場になっていると思います。他はいかがですか。宮下さん、タオルが売れ残っているのではないかと気になっていますが、一言どうですか。

**宮下泰尚**：初めて参加させていただきました。全国のあちこちで非常に熱心な取り組みがなされていることがとても身近に感じられました。また大山上池・下池という素晴らしい池を見させていただき、とても感動いたしました。豊岡で野生復帰を推進しているコウノトリは集団で行動しませんので、ねぐら入りはとても新鮮な気持ちで見ることができました。

今春亡くなられた絵本作家、かこさとし先生のご協力で作製したコウノトリの手ぬぐいは、おかげさまで昨日 10 枚完売となり、更に追加の注文もいただきました。ありがとうございました。（拍手）



**朝岡**：ありがとうございました。屋久島から来られた内田さん、いかがですか、

**内田大信**：屋久島から来ました内田です。山形の鶴岡市で開催するというので、以前より親しくさせていただいている奥田政行シェフが屋久島に昨年お越しいただいていたものですから、それが参加する動機でした（不純な動機でごめんなさい）。一日前に入って鶴岡の味を美味しく堪能できたことがすごく嬉しかったですし、私自身は、かねて世界自然遺産の担当をしていて、ラムサールのことをあまり勉強していなかったと改めて認識しました。皆さんと交流して、まちづくりや地域振興のあり方を共有できて、こういう方向性もあるのかと新たな視点もいただきました。



屋久島の世界自然遺産では原生的な自然をどうやって保護していくかという活動ですが、ラムサールは人がつくったものであってもこのように守られていく、まさに賢明な使い方、ワイズユースなのだと改めて学ぶことができたことがす

ごく良かったです。

残念なことに外来種をまだ食べていないので、もう一度来ないといけないのかなと。そのときはまたよろしくお願いします。ありがとうございました。（拍手）

**朝岡**：ありがとうございました。そろそろ締める準備に入りたいと思います。後お一人こちらから指名させていただきます。地元鶴岡で頑張っておられる佐藤さん。昨日はガイドをしてくださいましたが、お話をうかがっていないので、よろしくお願いします。

**佐藤英世**：山形県鶴岡市の佐藤英世です。2日間、鶴岡のいろいろなところを見ていただき大変ありがとうございます。昨年、大崎市で本市の事例発表をさせていただいた際、「全国の皆さんに東北の登録湿地を見ていただくのが事務局の考えだ。同じ東北のつながりで協力して欲しい」という熱いお言葉を頂戴し、このような協力の形を取らせていただいたところです。改めてありがとうございます。

ご参加の皆様には、昨日の交流会で鶴岡の食文化を実際に味わっていただいたり、ラムサール条約登録湿地「大山上池・下池」の現地にも訪れていただきました。もっともっと鶴岡のいろいろなところを見てもらいたいというのが正直なところですが、これを機会にまた訪れてもらえますと大変ありがたく思います。

また皆様には「ほとりあ」の活動にも非常に興味をもっていただきました。私も学芸員と協力しながら日常的にあそこで打ち合わせをしたり、保全活動や観察会に参加したりしています。地元の方や学芸員と協力しながら事業を進める上で、なかなかスムーズに運ばない面もありますが、これほど「おもしろいね」と言ってくれたことで、明日からまた頑張ろうという気持ちになりました。個人としても非常に励まされる、勉強になる会でした。どうもありがとうございました。(拍手)

**朝岡**：皆さん、ありがとうございました。それでは予告通り、笹川さんよろしくお願いします。

**笹川孝一**：法政大学の笹川です。今回、10回目の学習・交流会ということです。僕は1回目から5回目までコーディネーターをやっていましたが、その頃、第10回があることなど想像もしませんでした。これまで10回やれたということは、次の10回もやれるんだろうなと感じています。これが感想の1つです。

#### 自治体づくり、地域づくりがベースに



2番目の感想は、ずっとワイズユースを強調してきたのですが、今回初めて「地域づくり」「自治体づくり」を正面から議論できたことは画期的だなということです。この会議ではワイズユースと「地域の活性化」を強調してきましたが、「地域づくり」を正面から議論することはできてこなかった。ここに集まっている人は基本的には自治体の人たちだから、「地域づくり」や「自治体づくり」を地方自治法に則って行っていくことは当然のことですが、それが漸く実現しました。

### ラムサール条約登録湿地のある自治体の専門職人事交流を

3番目は、「ほとりあ」の活動で学芸員の上山さんの役割がものすごく大きいと改めて思ったことです。さっき南三陸町の阿部さんからも話がありましたが、昨日、鶴岡市の課長さんや部長さんと話をしていましたが、江戸時代からの藩のしくみの伝統もあって、日本の自治体には医者と学校の教員以外の専門職をおきたがらないという傾向があるように思います。

簡単でないかもしれませんが、南三陸で阿部さんの任期が切れたら今度は鶴岡でやるというような、ラムサール条約登録湿地を持っている自治体の専門職人事交流を、岡田さんから詳しいアドバイスをいただきながら進めていくとよいと思います。異動するのは大変ですが、国家公務員になったと思えばいいことです。せっかくいろんなところで力をつけて貢献してきた人たちが、任期満了で終わりというのはもったいないし、労働権の点から考えても全く理不尽な話です。そこは来年、市町村長会議ですから、そういうことも考えてもらえればよいなと思いました。

最後に、「都沢湿地追加登録はできる」と堀上課長が言うので、地権者の調整はあると思いますが、やれたら次の COP14 へ鶴岡市長も参加することになるかな、と思いました。こういう意見やアドバイスが出るのも、ワークショップのよさだと思いました。ありがとうございました。

**朝岡：**笹川さん、大事なことを言っていないのでは、食の話をするのではないですか？ 一言どうぞ。

**笹川：**鶴岡市がユネスコの食文化創造都市であることを、ここに来て初めて知りました。豊岡市や美祢市のジオパーク、屋久島の世界自然遺産など、いろんなことでラムサール+（プラス）国際的な認定を重ね合わせていって地域づくりにしているところがふえていて、「すごいな」と思っています。ウシガエルとアメリカザリガニを提供しているバルデのシェフに「フランス料理屋さんだからワインを」と言うと、「この日本酒も合うんですよ」と言われました。ワインと日本酒を交互に飲んでいたのですが、そういうことも含めてユネスコ食文化創造都市は素晴らしかったと思いました。会長市である大崎市の FAO の世界農業遺産「大崎耕土」もあります。ラムサール+α（プラスアルファ）で勝負していくのはいいかなと思います。（拍手）

**朝岡：**ありがとうございました。私も農学部の教員なので、食の話を言っていたかなければと思います、失礼しました。では岡田さん、よろしくお願いします。

**岡田知弘：**2 日間にわたって、私も大変勉強になりました。最初、朝岡さんからお話があったときに、湿地に関してもラムサールに関しても素人だからできないという話をいったんしたのですが、実際に参加して、昨日の大山上池・下池でお話を聞きながら、私が考えてきたこととそれほど変わらないことを皆さん方は日々やってこられているのだなと思いました。

### 自然との付き合い方を真剣に考え直すべき時期に

また、地域をどうつくっていくのか、いろんな立場や考え方の主体、企業人あるいは住民あるいは自治体関係者が一堂に会して知恵を出し合うことをしないと、本当に地域社会の持続が難しい時代に入ったと思います。特に今年は西日本に災害が激発していて、自然との付き合い方をもう一度真剣に考え直すべき時期ではないかと強く思ってきたところです。

鶴岡は大好きな街で、藤沢周平の生まれたところでもありますし、すぐそこに記念館があります。私は彼の作品を全部読んでいるのですが、そこに必ず風景と伝統的な料理が出てきます。それが一体とした形で存在していることが、街を歩いてもわかります。そういうことを体験できるというのが、私のもう一つのねらいでこちらの方に参りましたが、それ以上に今日のワークショップやグループ討論の作業を通して、久しぶりに私も楽しく学ぶ方になりました。

朝岡さん、笹川さんの社会教育、教育学系の知識、力がすごいなと改めて感心しました。通常、こういう自治体関係の会議に呼ばれて話をすると、質疑もせずに終わり、話す方も聞く方も欲求不満なのではないかと思うことがしばしばあります。とても素晴らしい会議を、学習会も含めて毎年開催し、3年に1回は首長会議という節目をもうけられているということで、すごい戦略性をもった取り組みを広がっておられる。しかもワークショップではカードをつくるという次の事業目標を明確にされている。私も大変勉強になりましたし、今後ともぜひお付き合いをお願いしたいと思いました。

2日間にわたり、ありがとうございました。(拍手)

**朝岡：**岡田さんは自治体問題研究所の理事長もされていて、日本の研究者のなかでは最も全国の自治体を回っておられる方だと思います。いろんな意味でご相談に乗っていただければと思いますので、これをご縁にさらに全国を旅できるように、皆さんもお声かけいただければと思います。

では最後になりますが、日本国際湿地保全連合会長の名執さん、一言よろしくお願ひします。

**名執芳博：**日本国際湿地保全連合（WIJ）の名執です。今回の市町村会議は、ドバイでラムサール条約のCOP13が29日まで行われ、昨日関係者がお帰りになったばかりの時に、堀上課長からCOP13でどんなことが話し合われたかという報告をいただいて、皆さん、とてもホットな報告を聞けて、ラッキーだったのではないかと思います。



今日は学習・交流会で、岡田さんはラムサールや湿地はご専門ではないということでしたが、お話の内容で、市町村の皆さんがふだんいろいろ考えておられることを整理する意味でも、とても参考になる良いお話が聞けたのではないかと思います。

最後にやっていただいた「えんたくん」ですが、朝岡さんや私など、環境教育をやっている人間には、ここ数年あれば馴染みのツールになっています。やっていただいた感想はいかがですか。「えんたくん」を囲むことでお互いの距離感が縮まりいろいろ情報交換ができる良いツールなのではないかと思います。



これから機会がありましたら、使っていただければと思います。

私たち WIJ は市町村会議のホームページの運営や学習・交流会の企画等で、市町村会議を手伝わせていただいています。これが始まったのは 13 年前、私が環境省の現在の堀上課長のポストにいたときに、なんとラムサール条約登録湿地を 20 箇所新規登録してしまって、市町村会議のメンバーも増えてくる時期に当たりました。それまでの市町村会議は、昨日開会してすぐやった決算報告、事業報告、翌年度の計画、予算、それだけで終わっていたのです。これでは皆さんが市町村会議に入っているメリットを感じられないではないかと、まずはホームページづくりをされたらどうですかと。その後、学習・交流会を始めました。それを提案させていただいたときに、まさか私が WIJ と関わっていくとは思っていませんでした。

### 市町村レベルでネットワークをつくっている国は日本だけ

市町村会議は、世界広しと言えども、市町村レベルでこういうネットワークをつくっている国は日本しかないのです。ラムサール条約の事務局にもすごく評価されている会議です。私たち WIJ としても、いろいろな形で支えさせていただこうと思っていますので、今後こんなことを企画していったらいいのではないかというご意見もどんどんいただけたらと思っています。

私は、個人的には日本の登録湿地を回るのをライフワークにしている、既に 52 箇所全部を回っているのですが、2 周目 3 周目ということで、皆さんのところにお邪魔させていただくこともあるかと思っています。今後ともよろしく願いいたします。今回はお疲れ様でした。ありがとうございました。(拍手)

**朝岡：**ありがとうございました。あっという間に終わりましたが、このワークショップは昨年からかなりいろんな工夫や実験をやりながらやっています。皆さんが少しでも楽しく研修ができるように工夫しています。「えんたくん」については今年初めて導入しましたが、やみつきになった人がいて市長をはじめ庁議でも「えんたくん」を使って、形式的な議論は止めようと言っている職員もいました。

いろんな学び方、議論の仕方をここでも経験していただいて、またいろんな人と知り合っていて、これが 1 つのネットワークとして具体的な形を 1 つでも 2 つでもつくればよいなど。ここまでカードの議論をしてしまうと、市町村会議はカードをつくるしかないのではないかと、外堀を埋めた感じがします。果たしてどのようなものになるか、皆さんも期待しながら、また来年もお会いできればと思います。

大変限られた時間ではありましたが、皆さんにご協力いただき、無事に終わることができます。どうもありがとうございました。(拍手)

**鈴木：**以上を持ちまして、2 日間に渡りましたラムサール条約登録湿地関係市町村会議の一切を終了いたします。大変ありがとうございました。(拍手)



## 市町村間の連携による湿地を活かした地域づくり

ラムサール条約登録湿地関係市町村会議  
第10回学習・交流事業の記録

2019年3月

発行：ラムサール条約登録湿地関係市町村会議  
会長市：宮城県大崎市

〒989-6188 宮城県大崎市古川七日町1番1号

産業経済部世界農業遺産推進課

TEL：0229-23-2281 FAX：0229-23-7578

編集：特定非営利活動法人日本国際湿地保全連合

〒103-0011 東京都中央区日本橋大伝馬町17-1 城野ビルⅡ 2階

TEL：03-5614-2150 FAX：03-6806-4187

この報告書は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています